つながる　ひろがる　校友コミュニケーション

桜縁

oh・en
おうえん

日本大学校友会
会報誌
2011.7
No.19

特集
ふるさとを想う　心をつなぐ
―校友たちが語る心の記録

自主創造
日本大学
あなたとともに
100万人の仲間とともに

新総長紹介

第13代総長 大塚吉兵衛教授

（おおつか・きちべえ）昭和19年栃木県生まれ。歯学博士。専攻は口腔生化学。昭和44年本学歯学部卒業。48年本学大学院歯学研究科修了。同年助手として本学に奉職し、49年専任講師、54年助教授を経て、平成5年教授となる。16年に歯学部長、大学院歯学研究科長及び歯学部総合歯学研究所長に就任。18年と21年に副総長、22年には総合科学研究所長を務める。保健体育審議会ラグビー部部長。（株）日本大学事業部代表取締役。（社）日本私立歯科大学協会副会長、（財）歯科医療研修振興財団理事、硬組織再生生物学会理事長、（財）森田奨学育英会理事。関東大学ラグビーフットボール連盟会長。趣味は、ジャズやポップスの鑑賞。好きな言葉は「自主創造」「自助努力」。

たくましく「自主創造」の気風に満ちた人材を育成
校友のパワーは日本大学発展の鍵

酒井健夫総長の任期満了（8月31日）に伴い、次期総長は歯学部の大塚吉兵衛教授に決定（任期は、9月1日から3年間）。9月1日に第13代総長に就任する大塚教授に、抱負を語っていただいた。

知力・体力・精神力を兼ね備えたたくましい学生、「自主創造」の気風に満ちた人材の育成に取り組みたいと考えています。近年、まじめで優秀な学生が増えてきましたが、反面、新しいことにチャレンジすることなく、自身の立ち位置を決めているようにも思えます。激動の現代社会で勝ち残っていくためには、自らの殻を破り、進んで新しいことに飛び込み、挑戦していくたくましさが必要です。日本大学は総合大学として、人材育成のための諸制度を整えていますので、これら制度をなお一層有効に活用し、社会の各分野で活躍できる人材を育てていきたいと思います。

校友の皆さまには、全国各地で卒業生の集まりを組織されるとともに、社会に出た後輩たちを愛情あふれる温かいまなざしで見守っていただき、感謝の念に堪えません。今後も皆さまのお力をお借りして、日本大学を日本一の大学にしていきたいと考えております。皆さまには、校友会活動により一層のご尽力をいただき、活動のさらなる活性化と本学へのご支援をよろしくお願いいたします。

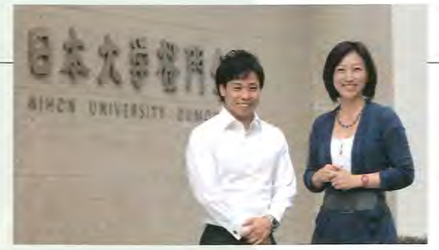
2011.7
No.19

「桜縁（おうえん）」の由来　「桜」は日本大学の校章にもあしらわれた花です。この桜（日本大学）を媒介として大学、校友、在学生のそれぞれが新しい「縁」を結び、互いに助け合い、協力し合いながら発展していくためのコミュニケーション誌という思いを込めて『桜縁』と名付けました。また、校友の方には母校の活動と後輩を、在学生の方は仲間同士で“おうえん（応援）”しましょうという心を託しました。

43 首長に聞く
「暮らし満足日本一」の実現へ
静岡県裾野市　大橋俊二市長

46 桜縁グラフ
校友への感謝とともにロンドン五輪の夢舞台に挑む
NEXUSフェンシングチーム　荻根澤千鶴選手

47 わが町の先生
ペットの治療だけでなく飼い主の心もケア
北海道札幌市　札幌緑が丘動物病院長　藤田　徹先生



特別企画
48 アスリートの引退。そして新たな挑戦へ！
田中ウルヴェ京さん
ソウル五輪銅メダリスト
対談　清水宏保さん
長野五輪金メダリスト

52 ふるさと礼讃
ナマハゲ
秋田県男鹿半島　佐藤光生さん

53 トップの肖像
食品トレー製造のトップメーカーは
人と環境へのやさしさでもトップを走る
株式会社エフピコ　小松安弘会長

先輩にインタビュー
56 学校の先生
市川市立第五中学校教頭……立岡康徳さん
インタビューアー……経済学部　福田由紀さん
私立帯広北高等学校教諭……加藤真紀子さん
かつらぎ町立四郷小学校教頭……田中秀和さん
見附市立見附特別支援学校校長……小山真樹さん

62 日大人　百花繚乱
おさかなポストの会代表　山崎充哲さん
山陰やさい家族代表　河津和彦さん

66 夢に向かって！
調教した馬の勝利が最高の喜び！
JRA美浦トレーニングセンター　調教助手　石井　輝さん

67 お達者通信
今も耳に残るニコライ堂の鐘の音
鹿児島県鹿児島市　島津久治さん

68 支部・部会紹介
商学部校友会
群馬県支部

69 書籍紹介

70 校友会ニュース

72 お知らせ・掲示板

抽選で総勢28名さまにプレゼント！
詳しくはP.72をご覧ください。

表紙の写真
八景島の海を快走するヨット
保健体育審議会「ヨット部」

桜縁（おうえん）　日本大学校友会会報誌　CONTENTS

1 新総長紹介

4 NU Scoop
運動部紹介……ヨット部
サークル紹介……リズム・ソサエティ・オーケストラ
キャンパスの人気者……鈴木康二郎さん、森本栄貴さん、池上晃司さん（大学院理工学研究科）
留学生紹介……于　妲さん（大学院薬学研究科）

8 特集
ふるさとを想う 心をつなぐ
校友たちが語る心の記録

10 真の復興の始まりは夏祭りから
あおもり観光デザイン会議代表世話人　角田　周さん
東北観光の復活が大きな支援につながる
ホテル青森社長　久保和見さん

14 東北からのメッセージ
三陸新報社記者……守　竜太さん
釜石市役所職員……佐々木育男さん
花巻農業高校教諭……上関　優さん
工学部３年……齋藤康平さん
経済学部２年……横道　藍さん

24 奮闘する市長からのメッセージ
福島県いわき市……渡辺敬夫市長
宮城県塩竈市……佐藤　昭市長
岩手県久慈市……山内隆文市長

26 復興支援チャリティーイベント
音楽系５サークルによるライブ

28 学生による被災者支援（気仙沼高校訪問記）
商学部学生たちの想いを届ける

30 校友による被災者支援
1800kmを走破して届けた長崎チャンポン……劉　済昌さん
困難なときこそ弁護士が求められている……野村吉太郎さん

34 お店紹介
富山県富山市　海老亭別館

35 お宿紹介
長崎県長崎市　矢太樓

36 フロントランナー
学べる喜び、自立への夢　“女性初”の道を照らす
弁護士　大城光代さん

42 趣味悠々
掌の上の“宇宙”・富貴蘭
大分県大分市　山本満彦さん

運動部紹介

保健体育審議会 ヨット部

昭和11年創部。以来、関東インカレでは男子、女子、総合、クラス別で50回以上、全日本インカレでも25回以上の優勝を誇る。39年東京大会の吉田正雄氏、松田健次郎氏に始まり、平成16年アテネ大会の470級で銅メダルを獲得した関一人氏ら、五輪選手も多数輩出。来年のロンドン大会では、ヨット競技で日本初となる金メダル獲得が期待される近藤愛氏も同部OG。目下の目標は、全日本インカレ総合優勝。
部員数30人（男子24人、女子6人）

自然の懐での勝負はチームワークが鍵 「努力するもの天をも制す」の精神で挑む

渡邉 整市監督
昭和42年文理学部体育学科卒業

レースを終えた選手たちが、江の島の海からあがってくる。視線の先に渡邉整市監督の姿を認めると、ほっとした表情も引き締まる。「一人のスター選手を探すより、部員のチームワークで勝ちたい」と言う監督は、数年前まで自宅に数人の部員を下宿させてきた。“ヨットの日大”という揺るぎない評判は、厳しさと人情味あふれる指導の下、築かれた。

２人１組で乗り込むのは小型ヨット（ディンギー）。レースは、五輪種目でもある470級とスナイプ級の２艇種に分かれる。レースでは、海上にマークされた３地点を回り、向かい風、横風、追い風を読みながらゴールまでのスピードを競う。「相手はライバルではなく自然です。帆に当たる風を操るには、バフと呼ばれる風のかたまりを見つけ、さざ波にも目を凝らし、時には周囲の建物や山が影響する風の向き、強弱を判断しなければなりません」と渡邉監督。船と一体化するには感性が必要。それを各部員に見出し、磨くのが自分の仕事だと言う。

部員が目指すのは“優勝”のみ。焦らず、あきらめず、地道に努力し、目標との距離を着々と縮めている。

５月29日に開催された「関東学生ヨット連盟新人戦」では、女子が470級、スナイプ級でそれぞれ１位に、総合でも優勝に輝いた

サークル紹介

日本大学リズム・ソサエティ・オーケストラ

昭和27年創設。来年60年目を迎える学生ビッグバンド。当初はタンゴアンサンブルとして発足したが、昭和30年代に当時流行したラテン音楽を取り入れ、現在まで続く演奏のスタイルを確立。これまで数々のコンテストで入賞したほか、『モントルー・ジャズフェスティバル』に出場したこともある。
現メンバー40人（男子20人、女子20人）

バンドマスター**吉田太朗**さん
文理学部ドイツ文学科3年生
「高校生のとき、このサークルの演奏を聞き感動しました。1年生のときからレギュラーメンバーになることができ、今、充実した学生生活を送っています」。

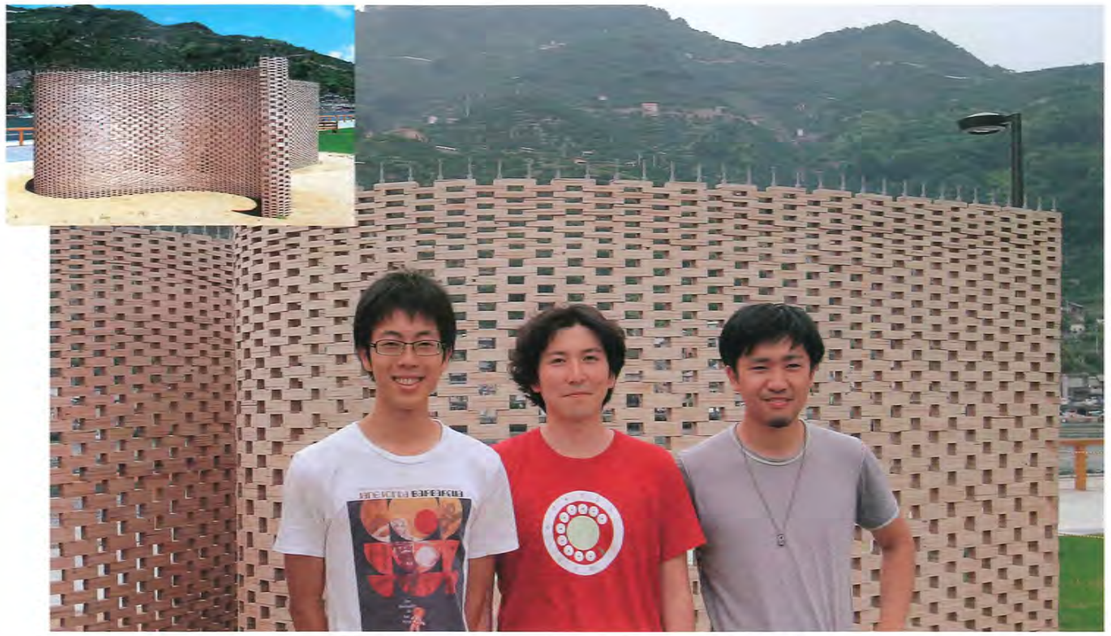
ラテンで結ばれたメンバーの熱い魂で 目指すは日本最大のコンテストでの入賞！

司会者から、ラストナンバーの「All The Things You Are」が告げられると、終演を惜しむ歓声がライブハウスに響いた。ジャズの名曲をラテン風にアレンジした陽気なリズムが始まると同時に観客はスイングし、バーカッションの軽快な響きに合わせて、床を踏み鳴らし、サックスの豪快なソロプレーにどよめき、拍手を打ち鳴らした。そしてブラスセッション全員が一斉にうなりを上げると、ついにステージと観客のテンションは最高潮に。リズム・ソサエティ・オーケストラは観客を圧倒し、演奏を終えたメンバーに万雷の拍手が鳴りやまなかった。

「この一体感がたまらない」とバンドマスターの吉田太朗さん。「練習のときにはメンバーがいろんな意見を言うからまとめるのは大変ですが、みんなが同じ方を向いている感じが好きなんです」。

このバンドが目標としているのが、８月に行われる学生ビッグバンドにとっての最高のコンクール「ヤマノ・ビッグ・バンド・ジャズ・コンテスト」。これまでにも優秀な成績を収めてきているが、「今年は絶対に入賞。負ける気がしません！」。ステージの余熱の中、目標を射程に入れた“自信”がきらりと光った。

キャンパスの人気者



池上晃司（いけがみこうじ）さん　鈴木康二郎（すずきこうじろう）さん　森本栄貴（もりもとえいき）さん

八幡浜元気プロジェクトが主催するコンペティションで最優秀賞を受賞した、大学院理工学研究科博士前期課程2年の3人

かまぼこ板でつくったアートな東屋（あづまや）
大学院生が八幡浜に〝元気〟をプレゼント

昨年夏、愛媛県八幡浜市の港の近くの公園に、町の名物「かまぼこ」の板２万3000枚を使って建てた奇抜な東屋が出現した。アートな東屋（あづまや）「かまぼこカーテン」である。このデザイン、設計、施工のすべてを担当したのが大学院理工学研究科で建築デザインを研究している鈴木康二郎さん、森本栄貴さん、池上晃司さんの３人。「八幡浜元気プロジェクト（YGP）」が公募した、かまぼこ板で東屋を建てるコンペティションで、最終審査に残った３人の作品は、市民の投票により最優秀賞を獲得。デザインを提案した森本さんは「東屋といっても屋根はありません。かまぼこ板の壁に、リボンが風に吹かれるような曲線をもたせ、堅いかまぼこ板で柔らかさを表現しました。不規則な曲線にすることで、壁の内側と外側にできたさまざまな空間を楽しめ、人は日差しの変化とともに日陰を求めて東屋全体を巡っていくことになります。そこから眺める風景も変わっていくんです」と特色を語る。

デザインは採用されたものの、いざ建てるとなると建物の基礎や構造のことなどまるで分からない。学内を駆けずり回って助言を仰ぎ、試作も学外の施設に協力を得た。「あらゆる分野の先生がいる日大だからできたこと。日大の底力を感じました」と池上さん。建設には、多くの日大生も現地に行き協力してくれた。

今年７月最初の週末、３人の姿は八幡浜にあった。完成後、数回行ってきた保守点検もこれで最後。今後の管理はYGPに移る。２日間の点検を終え鈴木さんが振り返った。「猛暑の中、23日間、作業に没頭した去年の夏が懐かしいです。デザインから施工、特に利用者である市民の方々と一緒に工事ができるなんてもう二度と経験できないと思う。本当に貴重な経験でした。これからも八幡浜の人にぼくたちの作品が愛されればうれしいですね」。

留学生紹介

中国・ハルビン市

東京

于妲（ゆた）さん

大学院薬学研究科薬学専攻博士後期課程２年

メタボリック症候群の患者を救いたい
治療法を医学と薬学の両面から研究

中国・ハルビン第４病院の医師だった于妲さんは、医療画像診断の専門医として診療に当たっていた。近年、中国でも、メタボリック症候群患者が急増しているとのことだが、于さんの下を訪れる患者も、その多くが内臓脂肪型肥満に加え、糖尿病、高血圧、高脂血症の合併症に苦しんでいた。

「わたしの父も糖尿病を患っていたので、その苦しみはよく分かります。だから、日々患者さんたちを問診する中で、少しでも苦痛を和らげてあげたい、根治させてあげたい、という思いが次第に強くなりました。でも、勤務していた病院では、西洋的な療法によって、患者さんの痛みや症状を和らげてあげることが中心でした。これではなかなか完治が望めません。そこで、生薬を用いる中医学や東洋医学に関心をもつようになりました。さまざまな論文を読む中で、生薬から有効成分を抽出する日本の優れた技術力を知り、日本でこの技術を学ぶことで、医学と薬学の両面からメタボリック症候群に挑みたいと考え、日本への留学を決意しました」。

ハルビン市郊外の田舎を訪れたとき

医師という地位と安定した収入を捨てて来日した于さんは、東京の日本語教育センターで1年間かけて日本語を習得した後、本学に入学した。

「今、マリアアザミの種子から抽出した有効成分の研究をしています。この成分は、肝臓病に効果があることが既に知られていますが、メタボリック症候群治療用としての研究は少ない。でも、この花はアジアのどこにでも咲いていて、入手しやすい植物なので研究テーマにしました」。

于さんの研究によって、メタボリック症候群の治療に新たな扉が押し広げられることを期待したい。

特集

ふるさとを想う心をつなぐ

きらめき広がる青い海
緑なす山々
大地をうるおす清らかな川

太鼓や鐘のにぎやかな響き
踊り、歌い、祈る人々
過去から受け継ぎ、未来へと伝えるまつり

それらが今、未曾有の天災によって、
悲しみの淵に沈んでいる

そして
わたしたちは今
「ふるさと」に対する想いを強くしている

仙台七夕まつり（宮城県仙台市）

相馬野馬追（福島県相馬市、南相馬市他）

いまこそ日本人魂を元気な日本にしようね。

平成23年3月11日14時46分、東北、関東を襲ったマグニチュード9.0の巨大地震。地震による大津波は、直後に東日本の海岸を飲み込んだ。

その後、原発事故も加わり、災害の規模は広がり、被災者は数十万人を超える。現在もその復興には、さまざまな問題が山積している。

千年に一度の大災害に見舞われた同時代人であるわたしたちが、そのとき、なにを感じ、なにをしたのか。

まつりが東北の地を一気に駆け巡るこの夏に、校友たちが語る心の記録をお届けしたい。

青森ねぶた祭（青森県青森市）

イラスト●なかだえり

真の復興の始まりは夏祭りから

オール東北の総力を結集

心と体に1年間ため込んだエネルギーが
短い夏に弾ける東北の夏祭り
そもそも祭りとは、豊作豊漁を願い、
荒ぶる神を鎮めるためのもの。
今年の祭りほど、その真義を深くかみしめるときはない

あおもり観光デザイン会議代表世話人
（国土交通省「観光カリスマ」認定者）
角田 周さん
昭和52年芸術学部音楽学科卒業

〔かくた・しゅう〕昭和28年青森県生まれ。本学卒業後、東京でイベント企画の仕事に就くが、昭和57年に帰郷し、金木琴ピアノ教室を開設。92年、地域活性化の企画集団「ラブリー金木」を設立し、翌年「地吹雪」を観光の目玉とする「雪国地吹雪体験ツアー」を企画、成功させる。平成元年、津軽鉄道の「ストーブ列車」の地酒とするめ焼きサービスを企画。その後、官民をまとめ、津軽半島観光ネットワークをつくりあげた。13年、国土交通省から「観光カリスマ」に認定される。22年あおもり観光デザイン会議発足。

――大津波が自然の荒ぶる脅威であるならば、時季になれば必ず花開く桜は、自然のもたらす静謐な驚異といえよう。今年ほど、それを強く感じる年はなかった。「こんなときにも、桜はいつもと変わらず咲くのか」と。

人々に静かな感動を与えながら、桜前線が本州を北上し、最北端の青森に到達したのが、4月も終わりを告げるころ。初々しい桜の花が風にそよぐ青森県・金木に角田周氏を訪ねた。「ストーブ列車」や「地吹雪ツアー」など、北国の負の部分を観光資源に反転、大きな話題を呼んだ「観光カリスマ」である。

東北地方が直面している過酷な試練に、角田氏はどのような想いで臨もうとされているのか。

待ち合わせ場所は、太宰治の生家「斜陽館」前。ゴールデンウイーク直前の観光バスが列をなすはずの場所に、人はまばらである。

東北人はおくて 誰かが一歩前に出てくれることをいつも待っている

青森県は南部地方で大きな被害が出ましたが、青森市や弘前市、津軽地方は被害を免れました。でも、発災当日の深夜、ある旅行会社から春の企画全部をキャンセルするという内容のファックスが送られてきたのを皮切りに、向こう3か月のすべての予約がキャンセルという連絡が立て続けに入りました。青森の観光関連施設はどこもかしこも同じ状態。余震もあるだろうし、交通機関もままならないわけだから、はじめのうちはしかたがないとは思ったけれど、日本全体を覆う自粛ムードが大きく影響しています。

例年なら花見の観光客でにぎわう弘前も閑散としています。それでも、自粛ムードの空気を打ち破って、弘前の桜まつりを開催したことは、大きな成果でした。「桜まつりをやる」と打ち出した段階では、「この非常時に」という非難の声もありましたが、結局、テレビなどで中継されて、いい効果が表れてきていると思います。

東北人は、自分が先頭に立つことを好まず、誰かがやりはじめるのを見てから動く人が多い。弘前で担当者が一歩前に出てくれたことで、周辺が勇気づけられ、いろいろな企画を出す地域や団体も出てきました。でも、原発事故の収束もおぼつかない今、観光への打撃は、秋、いや今年いっぱいは続くと考えています。東北人は忍耐強いといわれるけれど、もう我慢せずに、声に出さざるを得ない状態ですね。

――被災地の復興もままならない中、東北全般に風評被害が広がり、体力のない会社の倒産が相次いでいる。そんな中、青森県の人間に何ができるのか、被災地を支えるためには、どうしたらいいのか、その立ち位置に、角田氏は悩んでいた。

これまで東北地方を牽引してきたのは、東日本の交通の大動脈に沿っている岩手、宮城、福島といった太平洋側の県です。それに対し、青森、秋田、山形は脇役的存在でした。

今回、牽引役の地域が大きな被害を受け、脇役3県に何ができるかが問われています。観光に携わる立場で、山形や秋田の観光カリスマなどとも話をしています。今こそ、体力の残っているわれわれ3県が地域を盛り上げなければならないと思う反面、いったい何ができるのか、手を出していいのか、戸惑っている人も多いのです。まだ動くべきではないという意見もあり、どうしても足が一歩前に出ないというのが本音です。

青森は被災県であるとともに支援の担い手でもあるという、両方の立場にあります。機を見て、思い切った企画を立ち上げたいと思案中です。

観光の復興が大きなポイント 人が来てくれれば 必ず経済は立ち直る そのためには 新たな魅力をつくらなければ！

――今年は、青森の年のはずだった。昨年12月4日、東北新幹線が青森まで開通。今年3月12日は、九州新幹線が鹿児島まで開通し、北は青森、南は鹿児島まで、列島が新幹線でつながる記念すべき日になるはずだった。

待ちわびた新幹線、新しい観光への期待。しかし、前日の地震が鉄道のラインを断ち切り、未来への希望を一瞬にして打ち砕いた。

それから48日後の4月29日、不通区間が復旧し、鹿児島から青森まで新幹線でつながり、JRの青森の観光キャンペーンも立ち上がった。だが、現実は厳しかった。

新幹線への期待は大きかったですが、新幹線が通ったからといって魅力がなければ誰も来てはくれません。

東北新幹線の沿線には、個性的で魅力的な土地がたくさんあります。その土地それぞれがライバルですが、「客をとった、とられた」のレベルで張り合うのではなく、互いの情報の開示・交換を通してつながってこそ、訪れる人たちに魅力を与えられるのです。

わたしは小さな地域おこしの集団を主催していますが、地元は太宰治が生まれた金木です。以前、岩手に生まれた薄幸の詩人・石川啄木ゆかりの地と結び、情報交換のネットワークをつくりました。小さなネットワークでしたが、新たな企画に取り組むこともでき、互いに切磋琢磨することの大切さを痛感しました。

仙台七夕まつり

相馬野馬追

五所川原立佞武多

特に東北を訪れる人たちにとって、青森、岩手、秋田の北東北は一つの観光エリアと考えられています。せっかく、新幹線でつながった土地です。青森だけを考えるのではなく、被災地を含めた大きな地域の中で観光をとらえ、それらをネットワーク化していくこともわたしの仕事だと思っています。

観光は人を動かし、人が動けば、大きな経済効果が生まれ、地域が活性化する。それが、最終的に被災地へのいちばんの支援になるでしょう。

皆さんには、どこかに旅行をと思ったら、ぜひ、東北を思い出して足を運んでいただきたい。それが、復興支援につながると思っていただきたいのです。

祭りは東北人の生きがい
だからこそ
祭りが復興の起爆剤になるはず
8月、ねぶたを皮切りに
東北の祭りは一気に南下する

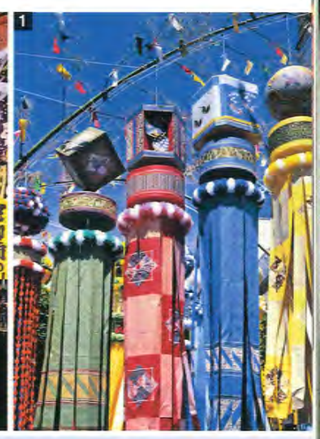
——金木の隣町に位置する五所川原に建てられた「立佞武多（たちねぷた）の館」に案内していただいた。青森といえば「ねぶた」。青森、弘前、五所川原といった地域ごとに名称や形などさまざまな特色が見られる「ねぶた」だが、高さ20m以上ある立佞武多は、五所川原独自のものである。建物には、大型立佞武多が極彩色の輝きを放ち、お囃子の響きと重なり合って、見る者に迫ってくる。

ねぶたは青森人の生きがいです。たとえ通夜や葬式があっても、ねぶたは許されるほど。東北の夏は短い。みんな、その一瞬の輝きである「祭り」のために、1年を過ごしますから、そのエネルギーの発散たるや半端ではありません。それは、青森に限らず、東北各地に共通するものです。

わたしは、これほどの力強さをもっている祭りの威力が、きっと、心の復興の起爆剤になってくれると確信しています。

ただ、東北人は、祭りのエネルギーを持続させるのが苦手で、祭りが終われば、粛々と日常に戻り、エネルギーや思いを外に出さなくなってしまう。今年は、祭りにかけるエネルギーを持続させて復興へとつなげ、風評被害にも立ち向かっていくようにしたいものです。そうすれば、祭りのエネルギーが、東北全体の心をきっと一つにできる！

点と点は線となり
線はやがて
面をつくりだす
東北各地の点を線でつなぎ
面にしていきたい
今こそ東北が一つになるとき



1 仙台七夕まつり（宮城県仙台市）仙台藩・伊達政宗時代に始まる歴史をもつ。ねぶたや竿燈が動の祭りに対して、静の祭り。色とりどりの美しい和紙が多用された短冊や吹き流しと呼ばれる七夕飾りが、仙台の街を華やかに彩る

2 8 青森ねぶた（青森県青森市）武者等を象った巨大な人形の山車灯籠を引き、その周辺を跳人が踊る。東北３大祭りのひとつで、青森県内数十か所に及ぶねぶたの代表格。禍祓いのための灯籠が起源だとされる

3 盛岡さんさ踊り（岩手県盛岡市）南部藩政時代から受け継がれている。南部盛岡城下に出没した鬼を退治したことを喜んで踊ったことに始まると伝えられている。太鼓を打ちながら踊り、その音は、見る者、踊る者の体の芯まで響き渡る

4 花笠まつり（山形県山形市）昭和38年、蔵王の観光開発とPRを目的に実施した「蔵王夏まつり」のイベントのひとつ『花笠音頭パレード』が始まり。今では東北を代表する夏まつりのひとつとして全国的に親しまれている。「ヤッショ、マカショ」の囃子ことばは、明治・大正の頃うたわれた作業歌による

5 相馬野馬追（福島県相馬市、南相馬市他）国重要無形民俗文化財。相馬氏の祖・平将門が野馬をとらえるために行った軍事訓練と、とらえた馬を神前に奉納したことに由来。1000年余の歴史をもつ。現在は相馬野馬追執行委員会を中心に、南相馬市、相馬市、飯館村、浪江町、双葉町、大熊町、新地町が支援して祭りを運営している

6 秋田竿燈まつり（秋田県秋田市）国重要無形民俗文化財。江戸時代から続いている豊作を祈る行事で、東北三大祭りの一つ。竿燈全体を稲穂に、提灯を米俵に見立てて、重さ５～50kgの竿燈を、額や腰、肩などにのせる妙技が披露される

7 五所川原立佞武多（青森県五所川原市）高さを誇るねぶた。明治・大正期には巨大化した人形の山車が作られたが、電線によって、練り歩くことが困難になり、高さが抑えられた。近年、電線の埋設化が行われ、平成10年から立佞武多が復活している

——角田氏は青森全体の観光ネットワークを形成し、オール青森で観光事業に取り組み、それを岩手、秋田の北東北に広めようとしていた矢先に、震災に見舞われた。現在も、その動きは凍結したままだ。

小さくても魅力のある土地は、東北各地に点在しています。それをネットワークでつなぎ、新しい観光のパワーをつくることが、震災復興の中でわたしに課せられた役割だと思っています。

まずは、「オール青森」で観光復興の端緒とし、岩手、秋田と北東北をまとめ、心を一つにして東北を大きな観光ネットワークで結んで、東北全体を元気にしていきたいのです。それは、最終的に「オール日本」、この国全体の元気につながると信じています。

——東北の覇者・伊達政宗といえども、東北全域を統一することはできなかった。日本史上、幕末のほんの一瞬の時期を除けば、東北地方が一つにまとまるということはなかった。しかし、そんな歴史を吹き飛ばすかのように、この夏、仙台市で「東北六魂祭」が開催され、初めて東北6県の祭りが集結した。東北地方が一丸となって震災に立ち向かい、未来へ一歩踏み出した歴史的イベントといえよう。

さきごろ岩手県平泉が、世界遺産に登録されたことも、大きな希望の光となっている。

角田氏の「オール青森」「オール東北」ひいては「オール日本」の観光構想は、少しずつではあるが実現に向かっている。北国の厳しい風雪を観光へと転換させた抜群のアイデアとバイタリティーをもって、これからの東北の復興に角田氏がどんな奇跡を起こすのか。本州最北の地からの活躍を祈る。

東北観光の復活が大きな支援につながる

ホテル青森社長
久保 和見さん
昭和44年経済学部経済学科卒業

東北の観光復興へタッグを組んでがんばりたい。
久保社長（右）と角田さん（左）

今年は青森新幹線開通により、青森では学会やキャンペーンが数多く予定されていました。また、3月12日は九州新幹線の開業日。本州の南北が一つにつながる記念すべき日の前日に大震災に見舞われたのです。

3月11日当日は、800人ほどの方々がホテルを利用されていましたが、震度５の激しい揺れにより停電。２日間は自家発電を利用し、宿泊のお客さまはもちろん、周辺の住民の方々の避難場所として活用していただきました。同時に地元NPO団体の要請を受け、ホテルにある羽毛布団や毛布、トイレットペーパーなど生活必需品を準備し、13日にはトラックで、岩手県南三陸町の志津川体育館へ運びました。

今、東北全体の経済は大打撃を受けています。それだけに角田周さんの、青森そして東北全体の広域観光ネットワークの実現には大きな期待をもっております。

人が動かなければ、経済の活性化は望めません。今こそ、より多くの方に東北を訪れていただき、美しい緑と山河、受け継がれてきた伝統や祭りを堪能いただきたいと願っています。

ホテル青森
〒030-0812
青森県青森市堤町1-1-23
TEL　017-775-4141

忘れないで

宮城県気仙沼市

三陸新報社記者
守（もり） 竜太（りゅうた）さん
平成15年文理学部社会学科卒業

「だいぶ落ち着いてきたんだって？」。

あの日から二カ月くらいたったころだろうか、東京に住んでいる友人からそんな電話がかかってきた。落ち着いた？　だいぶ？　いったい、どこの話だ。

仮設住宅の建設が進み、水道と電気は復旧したが、被災者の生活再建も被災地の復興もすべてはこれからなのだ。友人の話を聞いたわたしの胸に急速にわき上がってきたのは、大きな不安だった。もう皆、東北を忘れはじめているのではないか、という不安である。

3月11日。わたしは社内で記事を書いていた。激しい横揺れがきた。揺れの時間は長く、なかなか収まろうとしない。大津波警報がけたたましく鳴りだした。

津波の写真を撮らなければ。わたしは社を飛び出し、気仙沼港へ急行すべく車のアクセルを踏み込んだ。混雑を避けるため裏道から裏道へとハンドルを切ったが、やがて渋滞が始まり、とうとう前に進まなくなった。

防災無線が鳴り続け、異様な緊迫感と焦燥感が辺り一面を覆っている。これは本当に危ないかもしれない。港行きをあきらめ、すぐさま南気仙沼小学校に避難することにした。あの小学校なら川の近くだし、津波を撮れるという読みもあった。

読みは当たった。ところが、津波の規模は読みをはるかに超えていた。見たこともない黒々とした巨大な波。それが激しくしぶきを噴き上げ、漁船を転がしながら川をさかのぼってくる。まるでタンカーが何隻も横に隊列を組んで、すごい勢いで陸地を滑りながら襲いかかってきたかのようだった。

死ぬかもしれない。生まれて初めてそう思った。わたしは夢中でシャッターを切り続けた。手の震えが止まらない。目の前を人が流されていくのだ。ぼう然と見ること以外に何もできない。見るということの無力な正確さと残酷さをまざまざと知った。目の当たりにした現実を、心はまったく受け入れていなかった。

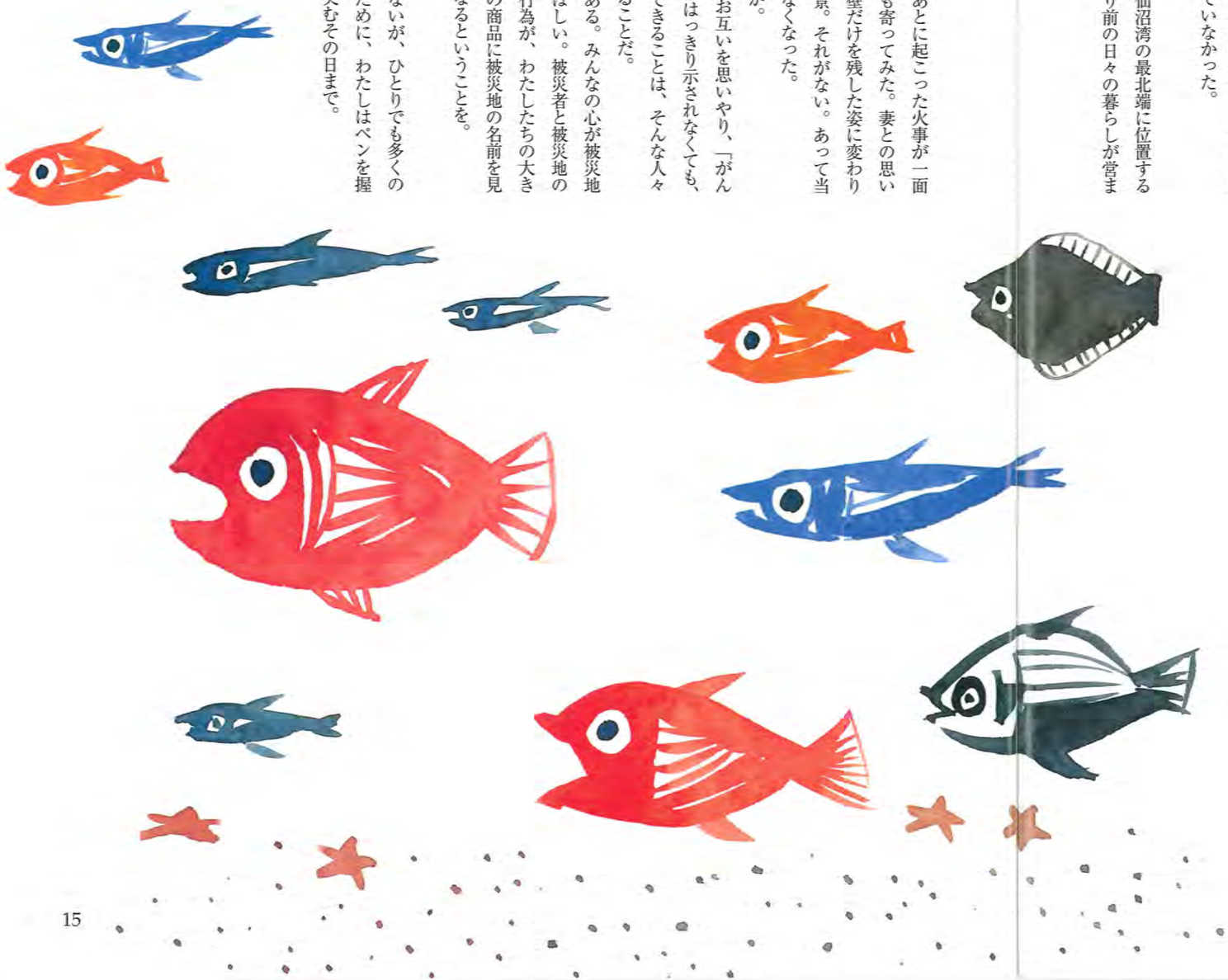
わたしは今、生まれ育った町・鹿折（しかおり）に立っている。気仙沼湾の最北端に位置するこの町には、あの日まで民家がびっしり建ち並び、当たり前の日々の暮らしが営まれていた。それがなくなった。津波が家屋を流し、そのあとに起こった火事が一面を焼き尽くしたのだ。新婚時代を過ごした町・内の脇にも寄ってみた。妻との思い出がいっぱいのマンションも津波に襲われ、柱と一部の壁だけを残した姿に変わり果てていた。わたしにとって、あって当然のそれらの風景。それがない。あって当然の思い出もなくなったし、あったかもしれない未来もなくなった。

このことに、わたしはどう立ち向かっていけばいいのか。

救いは、気仙沼の人の温かさを再認識できたことだ。お互いを思いやり、「がんばっぺ」と声をかけて励まし合う。たとえ、復興の道筋がはっきり示されなくても、とにかく前を向こうとしている。記者であるわたしに今できることは、そんな人々も含め震災のことをできる限り将来にわたって書きつづることだ。

復興には、国を挙げての安定した支援が何より必要である。みんなの心が被災地から離れてしまえば、復興はない。だから、忘れないでほしい。被災者と被災地のことを、心の中で片付けないでほしい。みんなの小さな行為が、わたしたちの大きな助けになるということを覚えていてほしい。スーパーの商品に被災地の名前を見つけたら、それを選んでくれるだけでも被災地の支援になるということを。

地方新聞の記者にできることは限られているかもしれないが、ひとりでも多くの人の心を被災者と被災地につなぎとめておきたい。そのために、わたしはペンを握り続けていく。今日も明日も、……ふるさとが静かに微笑むその日まで。



One for All, All for One

岩手県釜石市

釜石市役所職員

佐々木 育男さん

昭和59年法学部法律学科卒業

〝鉄の街・釜石〟から、高炉の火が消えて何年になるだろう。

わたしが小さかったころ、街そのものが、うなりを上げるエンジンのようだった。製鉄所にそびえる5本の煙突はもくもくと白煙を吐き、溶鉱炉で真っ赤に燃えたぎる鉄のように、大人たちは皆、昼夜の別なく汗まみれで働いていた。

そんな粘り強い男たちが泥んこになって、楕円形のボールをひしと抱き、投げ、蹴り、走りに走って、日本選手権で前人未到の7連覇を達成した。「北の鉄人」と呼ばれた新日鉄釜石ラグビー部である。チームの凱旋パレードに、街は熱狂のるつぼと化したものだ。

小学生のときは、街の繁華街に連れていってもらうのが楽しみだった。デパートには何でもそろっていたし、屋上の観覧車に乗れば鳥になったような心持ちで、大好きな海を思う存分眺められた。ごちゃごちゃとしたにぎわいに居心地の良さを感じていた。

大学に入るころには街の人口は減ってきていたけれど、まだまだ街は元気だった。明るい空、青く輝く海、入江を彩る岩と緑、街を三方から抱く山々。東京から帰省するたび、わたしは、ふるさとの自然のみずみずしさを改めて思った。肺が青くなるほど海の香りを吸い込みながら、この豊かな自然と街のにぎわいを守っていきたい。そんな思いを抱いて、大学を卒業したわたしは故郷に戻った。

程なく、昭和が終わり、明治時代から燃え続けていた高炉の火が消えた。街の空気が少しずつ変わっていくのを感じた。

あの日、午後3時少し前。わたしはまちづくり計画の担当として数年をかけて仕上げた総合計画を市議会にかけ、審議の時間を迎えていた。その直前、大きな揺れに見舞われた。程なく海が大きく盛り上がり、見たこともない真っ黒で巨大な波が押し寄せた。街は一飲みにされ、一瞬の間に多くの尊い命と穏やかな生活のすべてが波に流された。街に活気を取り戻したいと描いた未来の釜石のまちづくり構想も、水泡に帰してしまった。

大好きな海を初めて怖いと思った。

夢中で被害状況を確認するが、電話はつながらない。市役所前にはがれきや車がめちゃくちゃに重なり、外に出ることすらできない。絶望感に襲われていたとき、信じられない情報が入る。山を2つ越えた先にある海辺の鵜住居地区の小中学生が全員、釜石の中心街に向かっているというのだ。その数600人。

海岸から1㎞ほどの場所に立つ鵜住居の小中学校では、津波襲来の直前に、日ごろの防災の教えを忠実に守り、子供たちは教員とともに、迅速かつ適切な避難行動をやってのけた。その後、市街地の安全な場所を目指して集団を崩さず整然と歩を進めた。のちに「釜石の奇跡」と賞賛されることになる子供たちの冷静で果敢な行動である。わたしは、この子供たちとその家族のために開設した避難所の責任者を、4月末まで務めた。未曾有の困難を明るく乗り越えようとしている子供たちの健気さに、頭が下がる思いだった。

この子たちは、傷ついたふるさとに残された、かけがえのない宝である。彼らが将来、きっと、この経験を次代に伝える頼もしい守り手になり、街に活力と活気を与えてくれるだろう。

わたしには、大学受験を控えた娘がいて、東京の大学に行きたいという。「卒業したら戻ってくるか」と問うても、明快な返事は得られない。そんな彼女に「君が大学を卒業するころには、釜石は今よりずっといい街になっているよ」と言いたい。釜石を復興させ、娘が戻ってきたくなるような街にしよう。若い世代が住みたいと思う、今より新しい魅力的な街をつくりたい。それが今のわたしの役目であり、大きな願いでもある。

復興には血のにじむような努力が必要だが、時間をかけてはいられない。復興が遅れれば、若者が釜石を離れてしまう。少なくとも5年後には希望の手応えを得なければならない。不撓不屈の「北の鉄人」の街なのだ。できぬはずはない。ラグビーを支える高々とした精神「One for All, All for One（一人は皆のために、皆は一人のために）」は、今もこの街にどっしりと生きているのだから。

雨ニモマケズ風ニモマケズ

岩手県大船渡市

岩手県立花巻農業高等学校教諭
上関（かみせき） 優（ゆう）さん
昭和50年農獣医学部畜産学科卒業

3月11日、勤務先の花巻から70㎞余離れた大船渡の自宅に帰り着いたのは午後7時過ぎ。高台にある自宅は津波の被害を免れましたが、停電で動きがとれず、わが目を疑うような凄絶な光景を目の当たりにしたのは、翌日の早朝のことでした。海岸から市街地までがれきや車が重なり合い、道路がどこかもわかりません。その中で、消防団や警察の必死の救助活動が続けられており、想像を絶する状況に言葉も出ませんでした。

妻は大船渡北小学校の校長として、300人以上の被災者を受け入れて陣頭指揮をとっていたため、わたしも一緒に行動をともにしました。かつて宮古と陸前高田の水産高校にも勤務していたので、教え子や先生方の安否が案じられましたが、情報も入らず、目の前のことに対応するだけで精いっぱいでした。

避難所は多くの被災者と安否を尋ねてやってくる人々でごった返していましたが、皆まとまり、互いにいたわり合いながら過ごしていました。数日すると、何かできることはないかと多くの人々が避難所にやってきてくれ、子供を連れた何人もの教え子とも再会し、様子を聞くこともできました。

そこで、さまざまな状況に接するにつけ、宮沢賢治の「雨ニモマケズ風ニモマケズ」が思い出され、その一言一言が心に深く染みてきました。

お年寄りをかばいながら一緒に逃げた高校生
生徒を探しに行って津波にのみこまれた教師
がれきをていねいに取り除きながら、人命救助に奔走している自衛隊や警察
消防団の方々
不便な避難生活を皆で助け合って過ごす被災者たち
感情を抑えながら生徒の安否を尋ねてくる教師たち
亡くなった身内に心静かに寄り添う人
いち早く駆けつけてくれた医師や看護師の方々
全国各地から集まってくれたボランティアの方々

おばあさんの話をただただうなずいて聞いてあげる人たち
自衛隊や警察、ボランティアの皆さんの癒しになればと、彼らの車が通る沿道に花のプランターを置く花巻農業高校の生徒や親御さんたち……
「雨ニモマケズ風ニモマケズ」で宮沢賢治が理想として描いた人物像が、被災地のそこかしこにあふれていました。

賢治は、明治三陸津波地震が発生した明治29年に生まれ、昭和8年の昭和三陸地震の半年後に亡くなっています。当時の東北地方では地震や津波だけでなく、冷害や豪雨といった天災が立て続けに起きていました。「雨ニモマケズ風ニモマケズ」は、そんな時代を生きた賢治だからこそ表現しえた世界であり、そこに描かれた優しくたくましい魂が今、わたしの目の前で数限りなく躍動していることに、大きな感動を覚えました。

1カ月以上が経過し、まちが少しずつ落ち着きを取り戻すと、茫然自失の状態から覚醒した人々は、自分の心身の奥深くにしまわれていた悲しみや悩みに直面することになりました。今もわたしは休日には避難所に行って、できる限り相談を受けています。

岩手県の実業高校で教壇に立ちながら、高校ボクシングの指導を続けること35年。来年、定年を迎えます。突然、日常生活を断ち切られる現実に直面して感じることは、平凡でも一つの仕事をまっとうできたことの幸せです。また、岩手県内の高校に勤務し、ボクシングの仕事で日本中を駆け回っていたため、ふるさと・大船渡と関わることが少なかったことにも気づきました。

賢治は「世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」と語っています。わたしも退職後は、今まで培ってきたことを役立て、第二の人生の目標として、ふるさとの復興と幸福の実現に向け、地域のために生きていきたいと思っています。「ナミダヲナガシ」「オロオロアルキ」ながらでいいのだという、賢治の言葉を胸の底に抱きながら。

かけがえのないふるさと

福島県伊達市

第61回北桜祭実行委員長
齋藤 康平さん
工学部情報工学科3年

ぼくのふるさとは、県都福島市に隣接する伊達市。仙台藩の伊達氏発祥の地とも伝えられ、豊かで美しい自然、美味しい水に恵まれた果物の里、野菜の産地として知られている。特に有名なのは桃で、日本一の味だと自慢できる逸品だ。そんな滋味豊かな土地に、3月の震災の余波が音もなく忍び寄っている。

先日、親しくしている近所の農家の方が、見事なカブを箱いっぱい届けてくれた。せっかく収穫しても出荷できないと言う。農業の盛んな地域にとって、風評被害は死活問題。泥んこで健康そのもののカブを目の前にして、風評被害の恐ろしさを肌で感じた。

ぼくの自宅の隣にあるグラウンドには、原発事故の避難地区の人々の仮設住宅が立ち並ぶようになり、いつもとは違う風景が広がっている。最近は放射線量の値が大きいことも確認されており、平和でのどかなどこにでもあるような田舎に、目に見えない敵が不気味に迫ってきているようで、皆それを感じながらも、何げない日常に救いを求めようと、平穏を装って毎日を送っているような気がする。

家族で今後のことを話し合う機会も多くなった。強制的避難になるまでは、この地を離れないという両親が、ぼくには「おまえには未来がある。今からでも、郡山の大学の近くに下宿するなりして、ここから離れろ」と勧める。でも、美しいふるさとが傷ついている今、父母を残して自分だけが離れるわけにはいかない。ふるさとのありがたさなんて、これまで考えたこともなかったぼくが、今、初めてふるさとと向き合っている。

桃の花が果樹園一帯を染め上げる季節の風物詩が、愛宕神社の「箱崎の獅子舞」である。五穀豊穣・家内安全を祈るにぎやかな祭りの雰囲気の中、子供だったぼくは友達と連れだって屋台をのぞき込んで買い食いするのが楽しかった。夏は近くの愛宕山でカブトムシやクワガタを、小川では、ひざ下までジャブジャブ水の中に入ってザリガニ獲りに夢中になった。

子供のころの美しく楽しかったふるさとの思い出が、次々と鮮やかに思い出される。これはぼくだけではない。福島をふるさとにもつすべての人たちの共通の思いであろう。

ぼくが通う工学部の地、郡山市にも、原発事故の影響で大勢の人たちが施設に避難し、不安な暮らしを強いられた。いつふるさとに戻れるかわからない人たちである。学生たちはボランティアとして、避難所の間仕切設置を行った。若いエネルギーで、福島を元気にし、風評被害に立ち向かっていくことは、福島県で学ぶ学生にとって当然のことだと思う。

工学部では、第61回を迎える伝統の北桜祭の開催が決まり、現在、10月下旬の学園祭に向けて、約50人の実行委員を中心に計画を進めているところだ。

北桜祭の名物となっている「YOSAKOIそ～らん踊り」も計画している。祭りは東北人として、これからの1年を過ごすための起爆剤である。北桜祭も、千年に一度といわれる大災害を一瞬でも吹き飛ばせるようなイベントを企画している。工学部学生全員の福島を思うエネルギーが、元気や活力を運べるよう、がんばりたい。

原発事故の影響は、これからも長く福島を苦しめるだろう。でも、ぼくのふるさとへの思いは変わらない。就職などでふるさとを離れることがあっても、心はふるさとにしっかりと根付かせ、いつかは美しいふるさとへ戻りたいと思う。

美しい宮古の海とヨット

岩手県宮古市

横道（よこみち） 藍（らん）さん
経済学部産業経営学科2年

「すぐ近くにきれいな海があるんだから、ヨットでもやってみたらどう?」と父に勧められたのが小学校入学のころ。それからというもの、わたしはいつも宮古の海と一緒でした。

最初は、年上のお姉さんたちと一緒に小さいヨットに乗っているだけで満足していたけれど、いつしかレースの楽しさに魅せられ、毎日夢中で練習し、ヨット部に入った中学・高校時代にはいくつかの大会で好成績を収めることができました。

練習場所は、いつも宮古のヨットハーバー。そこには、部活動の先輩後輩をはじめ、世代を超えたヨット仲間たちが集っていました。彼らはわたしに、風と潮の読み方、海や波との付き合い方を教えてくれただけでなく、心をも育ててくれました。わたしにとってヨットハーバーは、青春時代の懐かしい思い出があふれている場所です。でも、3月11日の大津波は、そのすべてをことごとくさらっていきました。

あの日、東京で激しい揺れを感じたわたしは、しばらくして東北地方を大きな津波が襲ったことを知り、ただただ両親の無事の確認を急ぎました。電話もメールもつながらないことにいらだちながら、ニュースやネットの映像に目を凝らし、父の職場が流されずに残っているのを見て、両親が無事避難してくれていると信じました。連絡がついたのは1週間後のこと。父母の声を聴いたとき、やっと人心地がついたように思います。と同時に、あの海は、仲間は、そして皆と過ごしたヨットハーバーはどうなったのか、気持ちは宮古の海に飛びました。

大学入学を機に東京での生活が始まって以来、宮古の海はわたしから少し遠ざかりました。今までいつも見ていた海がない生活にちょっぴり寂しさを感じる一方で、海やヨットの世界とは違う友人たちと過ごす時間に新鮮な居心地のよさを感じ、都会での開放感を味わうようになっていました。そんなわたしに、宮古の海の存在の大きさを突き付けたのが、あの日の大津波でした。

交通機関が落ち着くのを待ち、ゴールデンウィークに帰省したわたしは、両親と互いの無事を確認すると、すぐにヨットハーバーに走りました。そんなわたしの目に飛び込んできたものは、見たこともない光景でした。ヨットも白い帆も、母校の部室もクラブハウスも、何もかもが津波に流され、かつての風景を思い起こさせるものは残っていませんでした。わたしの青春が一瞬のうちに消去されたような空虚感に襲われましたが、当日練習をしていた高校生をはじめ、ヨット仲間が皆無事であったと聞いて救われた思いがしました。

大好きな海が大きく牙をむいた瞬間を目の当たりにした後輩も少なくなかったはずです。でも、後輩たちはすぐにでも練習を始めたいと切望したと聞き、彼らが早く元の通りヨットに乗れるようにと祈るばかりでした。

その後、ヨットハーバーには全国のヨット仲間から多くの支援が集まり、ヨットや艇庫の寄贈もあったと聞きます。後輩たちも、国体やインターハイに向けて元気よく練習しているということです。

わたしが海から教わったものは数えきれないほどあります。後輩たちにはこの過酷な状況に負けず、海の素晴らしさを学んでほしいし、それをこれからヨットをはじめる子どもたちに伝えていってほしいと思います。それがわたしの願いです。そして再び、真っ白い帆にいっぱいの風を受けながら、ヨット仲間とともに、心のふるさと・美しい宮古の海に船出できる日が一日でも早く来ることを心待ちにしています。

がんばっています！ 東北 奮闘する市長からのメッセージ

今回の大震災で指定された特定被災地方公共団体は、東北・関東・信越の148市町村。各自治体とも、インフラの復興、がれきの処理、風評被害への対応など、さまざまな問題に全力で取り組んでいる。そのリーダーである市長が今、一番伝えたいこととは…。

一山一家（いちざんいっか）がいわきっ子の魂！ 街全体で復興と風評被害に立ち向かいます

福島県いわき市

渡辺（わたなべ） 敬夫（たかお） 市長

昭和44年法学部政治経済学科卒業

いわきの農産物は安全です！　それにもかかわらず、取引停止や価格暴落などの甚大な風評被害が起きています。市では、「がんばっぺ！ いわき」をキャッチフレーズに、いわれない風評を吹き飛ばし、安全でしかも美味（おい）しい農産物を安心して食べていただくためのキャンペーンを次々と打ち出しています。首都圏各所で開催している「オール日本キャラバン」には、大勢の方々にお越しいただき、「ここで買えてうれしい」「応援したい」など、生産者のみならず市民までを勇気付けるメッセージが多数寄せられました。市民が友人・知人に直接いわきの支援を訴える「市民からつなぐトモダチ作戦」では、絵はがき40万枚を無料配布し、いわき支援の輪が広がっています。

街の復興に向けては、震災以前から進めてきた、自然環境や生態系への負荷が少ない循環を基調とした持続可能なエコタウンを目指していきます。東北地方１位を誇る日照時間の長さを活用した太陽光発電や森林資源を活用したバイオマス発電をはじめ、最先端のエネルギー関連地元企業ともスクラムを組んで実現させます。日大の先生方からのご提言、ご協力もお待ちしています。

震災以降、全国各地の大勢の方々からいただいたさまざまなご支援に感謝いたします。「がんばっぺ！ いわき応援隊」も広く全国からの応募をお待ちしていますので、皆さまのさらなるご支援をお願いいたします。

がんばっぺ！ いわき応援隊　募集中

いわき市の復興を応援していただける気持ちをもった方ならどなたでも登録できます。詳細は、いわき市のHPにアクセス！

「うらと海の子一口オーナー」募集中

浦戸の漁業の復興に支援者を募っています。
詳細は、http://www.urato-uminoko.jp/ にアクセス！

現場から復興の望ましい姿を示したい！

岩手県久慈市

山内（やまうち） 隆文（たかふみ） 市長

昭和51年法学部法律学科卒業

気象庁の観測によれば久慈市は、大船渡、釜石、相馬に次ぐ最大8.6mの大津波が襲来し、甚大な被害を受けました。被害を最小化する「減災」の考え方の下、長年かけて築造した防波・防潮堤や河川堤防、市民の迅速な避難行動により、人的被害が最小限に抑えられたことは不幸中の幸いでした。

がれきや車などの撤去は既存の制度や考えにとらわれず、市独自の方針で実施しました。また、いち早く「久慈市復興ビジョン」を策定して、現場を知る立場から復興の望ましい姿を示し、市の再生のみならず、他地域に貢献できる新たなまちづくりを目指しています。

震災後は多くの方々からご支援をいただき、感謝に堪えません。中でも函館市からは228隻もの漁船を提供いただき、漁業者は復興の意欲を新たにしております。

今回の震災で、改めて湾口防波堤などの防災施設の必要性を痛感しました。同時に市民が災害に備える正しい知識をもち、いざというときに適切な行動をとれるよう「防災意識の日常化」を進めることもとても重要なことだと感じています。

久慈市は人的被害が少なかったためか、あまりマスコミに取り上げられていませんが、津波で大きな痛手を受けた中にありながらも、より被害の大きかった地域への助力を惜しまず、復興作業に汗している久慈市民の実情を、多くの校友の方に知っていただきたいと思います。

港の復旧と浦戸諸島の復興に全力 元気な港町・塩竈を取り戻したい

宮城県塩竈市

佐藤（さとう） 昭（あきら） 市長

昭和41年理工学部土木工学科

塩竈市で最も津波被害の大きかったのは、塩釜港沖に浮かぶ浦戸諸島です。10mに達するような大津波が襲い、島々を縦断し飲み込み、250戸あった民家のうち130戸が流されました。市では、浦戸の復興を重点事項としていますが、これほどの被害を受けたにもかかわらず、島民は支援を待つだけでなく、自ら「うらと海の子再生プロジェクト」を立ち上げ、支援を募り漁業の再建に向けて力強く歩みを進めています。

浦戸の復興とともに重点を置いているのが塩釜港の復旧です。市の中心部でも４mもの津波を観測し、港を中心に大きな被害を受けました。塩竈は水産加工が盛んな食産業のまちであると同時に、石油備蓄基地を中心とした港湾関連企業のまちです。産業の復興、労働の確保、雇用の安定化のために、港の機能を早急に100%回復させるように全力を挙げています。また、商店街の営業再開に向けての支援も検討しております。

これまでに全国から多くの支援を塩竈にいただきましたことは感謝に堪えません。近隣市町村に比べ人的被害が少なかったことは、これまでの津波対策と市民の適切な避難行動が合わさった結果だと思います。しかし、人的被害がゼロでなかったという事実を重く受け止め、今回の震災を早急に検証し、新しいまちづくりを進めてまいります。今後も皆さまからの支援をお願いしますとともに、ぜひ、復興に向けてがんばる塩竈を訪れ、市民に元気を与えてください。

いわき市「がんばっぺ！ いわき プロジェクト」の絵はがきとリストバンドのセットを抽選で10名さまにプレゼント。詳しくはP.72をご覧ください。

吹奏楽研究会
音楽を通して
皆さんに元気をプレゼント！

軽音楽部ハワイアン研究会フラワーレイ
自分たちにできることは音楽
音楽によって皆さんに笑顔を！

合唱団
歌うことを通して、
被災された人たちへ元気や勇気を！

リズム・ソサエティ・オーケストラ
わたしたちの演奏が
少しでも心の癒しとなりますように！
日本大学音楽団体チャリティーイベント

管弦楽団
震災の傷を癒やすことは難しいけれど
音楽で安らぎよ届け！

音楽で笑顔を！

日大生による
大震災復興支援チャリティーイベント開催

平成23年5月1日、東京都江東区のサンストリート亀戸において、本学学生支援部所属音楽団体５団体が「東日本大震災復興支援チャリティーイベント」を開催した。未曾有の大震災に対し、各音楽団体・ＮＵサミットの学生たちの「何ができるかを考え、できることから始めよう」という強い思いが結束して実現したものである。

5団体が合同でイベントを開くのは、今回が初めて。被災地の人々を思う学生たちの気持ちが、普段は別々に活動を行っている5団体をつなぎ、一つにまとめあげた。当日は強風の天候にもかかわらず、会場は人々と音楽に満ちあふれ、学生たちから聴衆へ、そして被災地へと復興を願う気持ちが届けられた。

当日、皆さんからいただいた募金166,127円は、
日本赤十字社の「東日本大震災義援金」へ全額寄付いたしました。

気仙沼高校訪問記

商学部学生たちの想いを届ける

6月20日、商学部の学生3人が気仙沼高校を訪問し、学内で募った辞書や参考書を生徒たちに直接届けた。

岩手県立気仙沼高校は、例年、約7割の生徒が大学を目指す。しかし、今回の大津波により、約4割の生徒たちが被災し、勉強道具を失うこととなった。その状況を聞いて立ちあがったのが、商学部の学生たちである。

受験勉強に教科書だけで立ち向かうには無理がある。受験を経験した自分たちだからこそ、高校生が必要な辞書や参考書を集めることができるにちがいないと、ゼミの代表者組織や学園祭実行委員会など4団体の学生たちが学内で呼びかけ、使わなくなった辞書や参考書の寄付を募ったところ、10日ほどで256冊が集まり、4月末、気仙沼高校へと送られた。その後も集まる勉強道具を何度か気仙沼高校に送ってきたが、今回は辞書や参考書を直接届けたいという希望がかなった。

3人は、「被災地の生徒たちの声をしっかりと聞いてきてほしい」という仲間たちの声を胸に、気仙沼へと向かった。

被災地の復興の状況に関する情報は、テレビなどのマスコミのみだったという学生たち、気仙沼の港をみて、「これでもだいぶよくなりましたよ」という話に愕然。がれきも積み上げられたままで、「復興」という言葉はあてはまらない悲惨さに言葉を失った。このような中、高校生たちが、何に困り、何が必要なのか、話を聞き新たな支援を考えている

大関　蘭さん（会計学科4年）

生徒の皆さんが明るく元気で、将来のことも真剣に考えていることに、大きな希望をもちました。わたしたちより年下の皆さんががんばっているのだから、わたしたちも負けられません。元気な声に対して、大学生のわたしたちなりに、みんなが以前のような笑顔を取り戻せるまで、なんらかの支援を続けていかなければと思っています。

菅野　敬さん（経営学科3年）

岩手に帰省していたときに地震に遭いましたが、その後東京に戻っていたので、状況を知らず、今回、復興が進んでいない現状に心が痛くなりました。東京から支援できることはもっとあるのではないかと思います。生徒会の方々と話をすると、はつらつとしてとても元気でほっとしました。心の傷はまだまだ根深いかもしれませんが、気仙沼高校の皆さんが、自分らしさを取り戻せるようがんばりたいですね。

石森康平さん（商業学科3年）

気仙沼高校の皆さんは、ほんとうに強いですね。ものごとを前向きに考えている姿勢に頭が下がりました。これからのまちの復興の原動力になるのは、高校生である皆さんだと思いますし、それを支援するのが、ぼくたちの役目だと思いました。「3.11」を忘れてはいけないのは、支援するぼくたちなんですね。

震災で大学進学という夢をあきらめなければいいがと心配していた学生たちも「東京の大学に行ければと思う」「東京で暮らすってたいへんじゃないですか？」などの発言に一安心。また「今回の震災でふるさとを大切にがんばっている大人たちを見て、進学でふるさとを離れても、必ず戻ってふるさとのためにがんばりたい」と将来を語る高校生たちの頼もしい言葉に感心していた

「楽しみにしていた中学校の卒業式が中止！　高校の入学式も体育館が避難所となっていたため、各教室で行った」という1年生の生徒。「水道や電気というライフラインの重要性を痛いほど知らされた」という男子生徒。「本やCDが簡単に買えない不便さを感じている」という女子生徒。いまだに全校集会は実施できず、部活動もままならないという。そんな生徒たちに、商学部の学生たちからの寄せ書きを送り、親しく話しかけた

株式会社京華園　代表取締役
長崎新地中華街商店街振興組合　理事長
劉（りゅう）　済昌（さいしょう）さん
昭和46年法学部経営法学科卒業

1800kmを走破して届けた長崎チャンポン

今思えば、長崎から1800kmも離れた気仙沼まで、よく炊き出しに行ったものです。あのときは夢中でした。

きっかけは3月下旬の中華街組合の会合でのこと。若手から「被災地を支援したい」との提案がありました。それなら、避難所で寒い思いをしている人たちに、温かくて野菜たっぷりで栄養満点の「長崎チャンポン」を食べてもらおうと、早速長崎市などを通じて現地との調整を図り、4月8日から2日間、気仙沼の3カ所の避難所で100人分の炊き出しをすることになりました。

組合全体で協力して準備した材料や調理器具、器、プロパンガスなどの機材すべてを積み込んだトラックとマイクロバスにメンバー14人が乗り、長崎を出発したのが7日の朝8時。食事とトイレ以外はひたすら車を走らせ、27時間かけて8日の昼ごろ、現地に到着しました。

出来たてのチャンポンは大好評。皆さん「おいしい、おいしい」と大喜びで、後日感謝の手紙までいただきました。一杯のチャンポンで、被災した方々が心身共に温まっていただけたのなら、がんばって車を走らせたかいがあったというもの。今後も継続して、被災地の状況に応じた支援をしていきたいと思います。

炊き出しの準備中、スタッフと作業の最終確認をしている劉さん（写真右から3番目）。
劉さんに「調理中の写真などはないのですか？」と尋ねると、「炊き出しが始まったら、写真を撮っている暇などないですよ」と笑って答えた

弁護士海援隊　代表弁護士
野村（のむら）　吉太郎（よしたろう）さん
昭和56年法学部法律学科卒業

弁護士海援隊を結成し、被災地でいち早く法律相談
困難なときこそ弁護士が求められている

坂本龍馬は、藩や身分に関係なく日本のことを考える仲間を集めて海援隊をつくったと、わたしは思うんです。実は弁護士も、藩と同じような全国各地の弁護士会の中で活動していて、縄張り意識が強い。これだけ甚大な被害を目の当たりにしても被災地の弁護士会に遠慮し、なかなか動こうとしない。だから、弁護士会という〝藩〟を超えて、一刻も早く被災者の法律相談をしようと有志を募ったのが「弁護士海援隊」です。普段は、人権擁護とか社会正義の実現など、崇高な理念を唱えているのに、いざというときに何もできないのであれば、「弁護士って何なんだ！」という気持ちもありました。

震災直後は同僚の弁護士ですら「弁護士が被災地に行って何になるんだ。必要なのは食料や医薬品ではないのか」といった声さえ上がるほどでした。でも、どのような問題もすべてが法律問題に帰結するのだから、被災地にも弁護士が必要なんです。

避難所を一つひとつ回りながら、わたしたちから声を掛けて話を聞くと、「よく来てくれた」という感じで、たくさんの相談がありました。遺産相続や住宅ローン、通帳や権利書が流されたという相談から避難所暮らしでの困り事まで、いろいろな話を伺いましたが、弁護士だからこそ気軽に話せたのではないでしょうか。「話せたことで自分の中のわだかまりが解消できた。ありがとうございます」とお礼の言葉をいただいたとき、この活動をやって良かったと実感しました。

わたしたちの活動を契機に、被災地での法律相談会も活発になってきました。また、積極的に活動したことで、多くの人に弁護士の仕事を理解していただいたと思います。これからも継続的に被災地に出向き、被災者の方々の力になりたいと思います。

【弁護士海援隊として活動した弁護士】
野村 吉太郎弁護士（中）
齋藤 理英弁護士（左）　昭和63年法学部政治経済学科卒業
「痛切に感じたことは、工場、設備を失った事業者の方々の痛み苦しみです。こうした方々に対して、われわれがうまく道筋を付けることで、産業の復興を早め、雇用が生まれていくと思います」
榎本 一久弁護士（右）　平成10年法学部法律学科卒業
「わたし自身、被災した祖母に代わって罹災証明や支援金申請をする中で、被災者の法律的なガイド役が必要ではと思い参加しました。医師のように物理的な支援はできませんが、お話を伺うことで悩みの一つでも二つでも取り除けるお役に立ちたいと思います」

長崎市 矢太樓

村木 營介さん
昭和42年法学部経営法学科卒業
（むらき・えいすけ）昭和19年長崎県生まれ。本学卒業後、祖父・覚一氏が創業し、社長を務める矢太樓に入社。調理場の皿洗いからホテル修業をスタートさせる。その後、営業職などを経て、昭和50年に2代目社長に就任。現在、長崎県旅館ホテル生活衛生同業組合理事長や長崎県観光連盟副会長、長崎国際観光コンベンション協会副会長、長崎地区防犯協会連合会会長、諏訪神社責任役員なども務め、地域活動にも尽力している。

「日本大学様には多数ご利用いただいております」

施 設●〔本館〕客室60室（収容人数200人）
和室35　洋室25
大中小宴会場あり
展望浴場（鉱火石の湯）、露天風呂あり
〔南館〕客室133室（収容人数500人）
特別室（和洋室）1　和洋室2
和室112　洋室18
大小宴会場あり
大浴場（鉱火石の湯）あり
交 通●車：長崎空港から40分
JR長崎駅から15分
住 所●長崎県長崎市風頭町2-1
TEL　095-828-1111
FAX　095-828-1122
H P●http://www.yataro.co.jp/

長崎ランタンフェスティバル

一口メモ
ホテル近くには坂本龍馬の像が立つ風頭（かざがしら）公園や亀山社中記念館、長崎ハタ資料館などがあり、希望すれば朝9時から約1時間半かけてホテルのスタッフが案内してくれる。また、長崎市は今でも異国情緒漂う街並みの散策が魅力だが、夏の精霊流し、秋は長崎くんち、冬には長崎ランタンフェスティバルと、四季折々に行われる行事が旅情をかき立て、いつ訪れても旅が楽しめる街である。

昭和天皇が2度お泊まりになった本館507号室からの夜景。特に日没時の景色は美しい。（左）風頭山山頂付近に立つ矢太樓。先代が、原爆で焼け野原となった長崎市の復興のシンボルとなって街を活気づけたいとの思いを込め、市のあちこちから見ることができる当地に建設した

長崎の夜は高くなるほど美しい！ 街中に光が舞い降りる感動的な夜景

深く陸地に入り込んだ湾を取り囲むように山が迫る長崎市。市随一の繁華街・思案橋付近から東南を眺めると、山上に立つ白い大きな建物が目に飛び込んでくる。眺望のよさで人気を呼ぶホテル、矢太樓である。

「うちの自慢の一つは景色。ここは173mの高さにあるので、昼も夜も港町の素晴らしい眺めが部屋からご覧いただけます。しかも街並みがけっこう近くに見えるんですよ」。そう話すのは社長の村木營介さん。特に〝1000万ドルの夜景〟といわれるパノラマは見事。夕暮れから、とっぷり陽が落ちる瞬間まで刻々と空の色が移り変わり、街明かりが輝きを増していく様は壮大な光のショーを観賞しているようでうっとりする。画家の山下清や作家の遠藤周作ら、このホテルに滞在し、ここからの夜景を愛した著名人も多い。

夕食は当地自慢の新鮮な魚をふんだんに使った「長崎の旬会席」。名物のしっぽく料理も選べるのがうれしい。そんな味覚と夜景が楽しめる天空の空間。思案橋から車で10分ほどで極上の時間が手に入る。

者典 読特
「校縁見たよ！」で宿泊の夕食時、ソフトドリンク一杯プレゼント（平成23年12月31日まで）

（料理の一例／季節により食材が異なります。）

海老亭別館

村　健太郎さん
平成11年農獣医学部水産学科卒業
（むら・けんたろう）昭和52年富山県生まれ。本学卒業後、調理師学校に入学。その後、徳島市の料亭や裏千家で修業を積む。平成16年、父である先代の急逝により、（有）いきいき亭代表取締役社長に就任。21年、店舗改装と同時に、懐石料理の「海老亭別館」と会席料理の「いきいき亭」に分ける。店を継いだばかりのときは大変苦労したというが、今では富山一の店にしたいと意気込む。

海老亭別館
営業時間●17:30～22:00（LO21:00）
定 休 日●日曜日、月曜の祝日（前日の日曜日は営業）、年末年始
住　　所●〒930-0082
富山県富山市桜木町9-21
TEL 076-432-3181
FAX 076-432-5043
H　P●http://www.ikiikitei.com/
会席料理をメインにした「いきいき亭」も併設。
いきいき亭
営業時間●11:30～14:00（LO13:30）
17:30～22:00（LO21:00）
定休日、住所、HPは同上

一口メモ
海老亭別館に行ったら，ぜひ座りたいのがカウンター席。村さんが，料理をする手元もお客様に楽しんでほしいとの思いを込めて大胆に改装した自慢の場所だ。お客の食事の進み具合にも目が行き届くため、絶妙のタイミングで料理が出せるようになったという。涼やかに流れる滝を眺めながら村さんの技と料理、そして何より会話が楽しめるここは、まるで劇場の特等席のようである。

涼やかに滝が流れる庭園。凛とした雰囲気に包まれて和食の粋が楽しめる

者典 読特
「校縁見たよ！」で「ホタルイカの沖漬け」の小鉢をサービス（平成23年12月31日まで）

生きたイカを漬けるから美味（うま）い！ 富山の珍味・ホタルイカの沖漬け

立山のミネラル豊富な雪解け水が流れ込み〝天然の生簀（いけす）〟と呼ばれる富山湾と自然豊かな北アルプス立山連峰に囲まれた富山市。ここは、一年を通して山海の食材の宝庫である。

そんな四季折々の新鮮な魚介や山菜を使い、彩り豊かな懐石料理に仕立てて出すのが市内でも歴史と格式を誇る料亭「海老亭別館」の4代目・村健太郎さんである。

「春から初夏にかけては白エビやタイ、8月までは毛ガニが、秋から冬は本ズワイガニやブリ、タラが美味（おい）しいです」と村さん。普段は、滝が流れる庭園を背に白木のカウンターで自ら包丁を握り、お客をもてなす。

そんな村さんにお店の自慢の一品を尋ねると、意外にも「ホタルイカの沖漬け」だと言う。「タレは先代が生み出した秘伝。シーズンになると私自身が漁船に乗り込んで獲れ立てを漬けます。おそらく店主自ら沖に出るのはうちくらいのもの。文字通り、沖漬けです」。獲れ立てをタレに漬け込むとイカがタレを吸い込み、身の隅々まで行き渡る。さらに、プリッとした食感が損なわれない。

酒との相性抜群！　まさに絶品である。

いきいき亭の「料亭の味　ほたるいかの沖漬け」を抽選で3名さまにプレゼント。
詳しくはp.72をご覧ください。

学べる喜び、自立への夢——戦後の沖縄をたくましく歩み〝女性初〟の道を照らす

弁護士
大城 光代さん
昭和31年法学部法律学科卒業

（おおしろ・みつよ）昭和7年台湾台南市生まれ。本学卒業後、3度目の挑戦で司法試験に合格（本学2人目の女性合格者）。昭和33年、琉球政府法務局に弁護士登録。家事事件を中心とした弁護士活動の後、43年、那覇家庭裁判所判事に。その後、那覇地方裁判所、福岡高等裁判所、東京地方裁判所等の判事を経て、那覇家裁、那覇地裁、静岡家裁、横浜家裁の所長を務める。平成9年、定年退官。その後、数々の行政の仕事に取り組み、現在は更生保護法人「がじゅまる沖縄」理事長。14年、勲二等瑞宝章受章、21年、琉球新報賞社会教育部門受賞、同年、沖縄県功労者一般篤行部門表彰。

昭和27年、沖縄の石垣島から向学心に燃えた一人の少女が本学に〝留学〟した。その後、彼女は「沖縄初の女性弁護士」となり、さらなる活躍の場を求め、裁判官の道へ。「女性第一号」といわれるポジションを歴任しながらも決して気負わず、実力で勝負してきた女性・大城光代さん。妻として、母として、そして一法曹として懸命に歩んだ人生。そして、その経験を通して今感じることを伺った。

戦後の混乱期。学ぶことがままならなかった少女時代

——台湾台南市のお生まれだそうですが、どのような子供時代を送られましたか？

とにかく読書が好きな子供でした。6年生のときには家にある子供向けの本を読み尽くし、母が愛読する「主婦の友」など大人の本まで読んでいました。心配した母が学校の先生に相談しにいったそうです。

自宅は1階が父（注）の弁護士事務所、2階が住まいという造りで、わたしは父の働く姿を間近に見て育ちました。「お父ちゃんのようになりたい」と、父が書斎で仕事する様子をまねているうちに読書や勉強が好きになっていったようです。

思い出深いのは、父がどんなに忙しいときでも家族と一緒に夕食を取ってくれたこと。食事をしながら子供たちに、その日あった出来事やそのとき何を考えたかなどを話させたものです。そして、父もよく自分の仕事のことを語ってくれました。父の話を聞くうちに、「弁護士は人助けのできるいい仕事だな」と思うようになりました。

——終戦直後の状況や教育環境についてお話いただけますか？

台南で女学校入学時に終戦を迎えましたが、通い始めて3ヶ月で学校は閉鎖になりました。沖縄はアメリカの占領下にあったので、父の出身地である沖縄に戻ることもできませんでした。翌年、台南にできた日本人中学校で2年生の勉強を始めましたが、半年後に沖縄引き上げが決まり、またもや勉強を中断するしかありませんでした。

引き上げ先は父の郷里である座間味島でしたが、そこには中学校がなく、翌年、石垣島に移り住むまでの間は学校に行けず、自給自足の生活をしました。

石垣島では八重山初等高等学校（現在の中学校）2年に編入しました。満足に教科書もない状況でしたが、勉強できることがうれしくてたまらなかったことを覚えています。その後は八重山高等学校へ進み、大学進学を目指して勉強に励みました。

父のような法曹になりたい！夢を抱いて大学進学

——当時、本土の大学に進むということは、外国に留学ということだったのでしょうか？

当時、沖縄は日本ではありませんでしたからね。国費留学制度を利用して進学する道しかありませんでした。わたしもそのつもりでしたが、受験した国立大学の一次試験合格後に私費留学制度ができました。そのとき父は「私費留学制度ができた以上、自力で子供の教育をすることができる者は国費制度を利用するべきではない。おまえが受ければ合格するだろうが、それでは誰か一人進学の機会を失う。なんとかやれると思うから私費で行け」と言ったのです。

父のこの言葉は、決して自己中心的にならず、弱い立場の人に目を向けることが大切だということを教えてくれました。今でもわたしの人生の指針となっています。

——なぜ日大法学部を選ばれたのですか？

もともとは国立大学を受験する予定でした。しかし、私費留学生へのパスポートの発行が遅れて那覇で1カ月待たされることになり、その大学の試験に間に合わず、急きょ父の母校である日大を受験することに決めました。上京するために那覇の港から船に乗りましたが、ひどい船酔いで4日後に横浜港に着いたときはもうフラフラ（笑）。その翌日、試験を受けました。

——司法試験を目指して勉強したときのことをお話いただけますか？

在学中は図書館で開館から閉館まで勉強していました。3年

1 昭和32年、3度目の司法試験を終えて沖縄に里帰りしたときの1枚。那覇市の実家「弁護士安里積千代事務所」の前で。左から、お父さん、大城さん、お母さん、大学の先輩、お姉さん、前には弟さんたち　2 昭和34年、第13期司法修習生時代。司法研修所前で検察記録を抱えて　3 同じクラスの司法修習生たちと昼食会。クラス50人中、女性は2名だけだった　4 沖縄で弁護士として活躍していたころ。石垣治安裁判所前にて

（注）安里積千代（あさと・つみちよ）。昭和3年本学法学部法律学科卒業。
戦後、八重山群島知事を務め、その後沖縄復帰運動に尽力。元衆議院議員。

からは沼ゼミ（沼義雄教授）に籍を置き、先生のご指導の下で必死に勉強しました。そこまでがんばれたのは、皮肉にも入学当初のあることがきっかけなんです。わたしは「大学生はみんな一生懸命勉強するもの」と信じていたのですが、意外にも不真面目な人がいた（笑）。カンニングを要請する人がいたんですよ！　今から思えば、わたしはうぶだったなと思いますが、でもその時は、何でこんな人がいるんだろう、わたしは勉強するために大学に来たんだ、絶対に司法試験に合格しなければと思い、決意を新たにしました。

しかし、初めての受験ではありえないミスをして大失敗。教授から現役合格の太鼓判を押されていたので、ずいぶん落ち込みました。

その後は弁護士事務所で事務員をしながら勉強を続けましたが、2度目の受験は結核を患い勉強できずに不合格となり、3度目の正直で合格しました。

沖縄初の女性弁護士として新民法啓蒙などに奔走

――「沖縄初の女性弁護士誕生」ということで、ずいぶん注目されたそうですね。

はい、たくさん取材を受けました。でも、マスコミの皆さんはわたしが弁護士を志したのは「か弱い女性の味方になり、その権利を擁護するため」だと勝手に解釈して書くんです。これには困りました（笑）。だって、わたしは一個人として法律の世界に入っただけです。男女どちらの味方でもありません。物事は公平に見なくてはいけませんからね。まあ、それだけ女性弁護士が珍しかった時代ということでしょうね。

――当時の弁護士活動についてお聞かせください。

司法試験合格後、琉球政府の弁護士資格を取り、昭和33年から弁護士として働きはじめました。前年に沖縄で新民法が施行されたため、その普及と啓蒙のために各地を講演して回りました。家督制度が廃止されて女性でも相続ができるようになったり、お互いに好きであれば結婚できたりということは、男尊女卑が特に強かった沖縄の女性が待ち望んだものですから、女性も男性と同じ権利を持つことができるようになりましたと沖縄の女性に知らせることは、とても大きな役目でした。

また、当時政治活動で忙しかった父に代わり、法律事務を処理したり、結婚してからは同じく弁護士である夫の傍らで事件調査、書類作成などをしました。しかし、どんなにがんばっても、わたしの仕事は、周囲からすれば父や夫がやったことと見なされてしまうんです（笑）。

わたしは自分の仕事がしたかった。わたしのやった仕事は、わたしの業績として認めてくれる仕事がしたかったんです。そのためには、弁護士よりも裁判官の仕事がいいと考えました。でも、自宅に事務所を構える弁護士業に比べ、裁判官は時間に縛られます。息子が小さいうち

現在も沖縄の今を発信し続ける「オキナワグラフ」。その創刊号（昭和33年4月）で大城さん（当時は旧姓・安里）が紹介された。「日本全国司法試験に男性を尻目に見事合格」「今後沖縄のか弱い女性のために大きな福音となることだろう」などの記事から、沖縄初の女性弁護士に寄せる大きな期待がうかがわれる

は難しいので、幼稚園の年長組に上がるのを待って任官することに決めました。

裁判官の世界で実力勝負 家事は仕事のストレス発散

――任官したときにも、沖縄で「女性判事誕生」と報道されたそうですね。当時はどんな事件を担当されましたか？

昭和43年に那覇家庭裁判所判事に任命され、少年事件を担当しました。当時の非行原因の多くは貧困、家庭崩壊にあり、審判をしながらもその生い立ちに胸を痛めたものです。

印象深いのは少年院送致した少女のことです。彼女が退院後に、新たな環境を求めて上京する際、少年院に予算がないので、旅費60ドルを出してあげたことがありました。それから20年たったある日、彼女から「結婚して子供もできました。お借りした旅費をお返ししたい」と連絡があったんです。少年事件は彼らのその後が気がかりなものですから、わたしを探して連絡してきてくれた彼女の気持ちが本当にうれしかったですね。

――仕事と家事・子育ての両立はたいへんだと思いますが、どのような毎日をおくられていたのでしょうか。

わたしにとって家事は仕事のストレス解消でしたからたいへんとは思いませんでした。ただ、家事は際限のないものなので、上手に手抜きすることが肝心です。完璧にやろうとすると負担になってしまいますからね。

また、仕事以外のときはどこに行くにも息子を連れていき、家では炊事も手伝わせて、密度の濃い親子の時間を過ごすことを心掛けました。

小学生になると、「仕事とはやるべきことを責任もって果たすこと」と教え、夫とわたしの仕事についてよく話して聞かせました。そして、「あなたの仕事は一生懸命勉強して、お友達と仲良くすることよ」と教えると、あとは「あれしろ、これしろ」とは一切言わない。息子は子供なりに責任を理解して〝仕事〟をがんばっていましたよ。

――女性の法曹ということで苦労されたことは？

女性ゆえの苦労はありませんでした。特に裁判官の世界というのは実力で評価してもらえると思っていたので、引け目を感じませんでした。これも法曹界の女性の先輩方が道を切り開いてくださったおかげです。わたしが失敗してその道筋を閉ざしてはいけないと、いつも意識していました。

――長く仕事を続ける中で、大変な時期もあったのではないでしょうか？

昭和52年、夫が急逝し、あまりのショックに呆然としました。当時勤務していた福岡家裁は少年事件が多くて多忙でしたから、勤務中は気が紛れたのですが、家に帰るとすることがなく、いろいろ考えてしまってつらくてたまりません。そこで、さらに忙しい高裁に配置替えを希望し、仕事に明け暮れることでなんとか立ち直ることができました。仕事に救われましたね。

あと、つらいときには刺繍（ししゅう）や編み物など手仕事をするんです。何かやってないと人間ってろくなこと考えないでしょ。そういえば、1回目の司法試験に落ちたときも、せっせとベストを編みました。編み上げたら「よし、またがんばろう！」って（笑）。気持ちを切り替える自分なりの方法をもつのは大切ですよ。

昭和58年、女性初の東京地方裁判所民事通常部裁判長を務めた頃

弁護士から裁判官へ。本当の意味で男性と同等の仕事をするには裁判官の仕事がいいと考えたのです。

目標という〝芯になるもの〟をもっていれば、それを中心に世界が広がるはずです。

社会事業に力を注ぎつつ家庭教育の大切さを訴えたい

――定年退官後、どのような活動をされていますか？

主に行政のお手伝いをさせていただいています。「おきなわ女性財団」では理事長を務め、多くの相談を受けてきましたが、ドメスティック・バイオレンス（DV）、児童虐待、いじめなどの暴力が後を絶ちません。自己愛だけが先行して、相手を尊重する気風が失われているのだと思います。

また、裁判官時代、犯罪を繰り返す人を何人も見てきたので、「犯罪者の再教育」の重要性を実感しており、更生保護事業にも力を注いでいます。でもね、こういうことは家庭教育がきちんとしていれば必要ないんですよ。事件・犯罪を犯す人の背景には家庭の問題がありますから、子育てはたいへん重要です。

また、最近は、専業主婦になりたいという女性が増えているようですが専業主婦を目指すなら、「専業主婦のプロになれ！」と言いたいですね。家事はもちろん、子供を立派に育て、夫を支え、社会参加をする。長らく主婦の労働は無視されてきましたけれど、主婦業は立派な職業です。男性も女性もそれを認識すべきですね。

――最後に、学生たちにメッセージをお願いします！

大学時代に一生の目標を立てて、その実現のためには何をするべきか考えて勉強することです。方向が定まらなければ勉強のしようがありませんからね。目標という芯になるものをもっていれば、それを中心に世界が広がるはずです。どんなに時代が変わっても、人間は自分の力で生きていかなくてはいけないんです。目標とは言い換えれば「生きる手段」。それに向かってしっかり努力をしてください。

平成21年、社会・教育への功績を讃えられ「琉球新報賞」を受賞。左は授賞式にて。
受賞の挨拶では、自ら受けた教育の道程、父親への感謝、更生保護事業に対する思いを語った

平成14年に受章した、
勲二等瑞宝章

珠玉の逸品「紅赫殿（こうかくでん）」
「赤い花は女性的で、神気を感じる」と山本さん。昭和62年、富貴蘭を求めて高知県を旅したとき、奥さまの親戚の縁で当時の日本寒蘭会会長・東条五郎氏との面会がかない、その折、東条氏のご子息も日大OBという縁でプレゼントされた

昭和57年に洋画家・黒崎陽人氏によって命名された証書

趣味悠々

山本満彦さん
昭和55年法学部管理行政学科卒業

掌（たなごころ）の上の〝宇宙〟生命力たくましく進化し続ける富貴蘭（ふうきらん）

葉姿の良さ、花の顔（がんばせ）とすがすがしい香り、花や葉の変化（へんげ）が生み出す珍種・希少種が、多くの人の心を虜（とりこ）にする富貴蘭。江戸時代には将軍や大名たちを熱中させ、バブル経済期には数千万円の値が付く株もあったという。そんな富貴蘭を山本満彦さんは「質実剛健」と表現する。「小ぶりで優雅な姿の中に、強い生命力が宿っています」。

山本さんが、野生蘭に魅せられたのは、今から20年以上前のこと。赴任先の竹田市で山歩きを楽しんでいたとき、日陰に楚々（そそ）とした花を咲かせる自生のエビネ蘭を美しいと思った。以来、さまざまな東洋蘭を育てたが、10年ほど前からは富貴蘭に熱中している。「葉がしっかりし、がっちりとした富貴蘭のもつ神秘に惹（ひ）かれました」。

育てるコツは手を掛けないこと。「もともと過酷な自然の中で自生する植物なので、1週間に1度の水やりだけで、鉢は軒下に置いています」。

夕べには、これぞと思う鉢を手に晩酌（ばんしゃく）を楽しむ。その日の気分によって、愛でる鉢は変わる。掌に包んだ富貴蘭に宇宙を感じ、人間の生命の不滅について考える。もう一方の手の杯を傾けながら……。

質実剛健な富貴蘭

（やまもと・みつひこ）昭和32年大分県生まれ。本学卒業後、法学専攻科で学んだ後、東京で民間企業に就職。昭和59年、故郷へ戻り、大分県警察に奉職。別府、竹田、大分、日田等県内の警察署を経て、現在、県警本部監察課に勤務。奥さまの潤子さんも本学文理学部OG。

仕事柄、平常心で事に当たる姿勢を貫いており、朝な夕なに富貴蘭を眺め、変わらぬたたずまいに、安心感を覚えている。

首長に聞く

静岡県裾野市市長 大橋俊二さん
昭和42年大学院医学研究科博士課程修了

（おおはし・しゅんじ）昭和11年静岡県生まれ。医学博士。本学大学院修了後、沼津市立病院小児科、中駿赤十字病院小児科勤務を経て、昭和44年、裾野市に大橋小児科医院（現・医療法人社団裾野大橋内科小児科医院）を開院。平成元年、医療法人社団となる。6年に同院理事長就任。同年、裾野市長選挙当選し、現在5期目。全国市長会副会長・全国保健センター連合会理事長等の要職も歴任した。

医師人生40年余の経験を生かし「暮らし満足日本一」裾野市の実現へ

東日本大震災へのメッセージ

「自然の脅威、また自然の恵みのありがたさを常に念頭に置いて、一日も早い復興に向け、富士山の裾野から継続的支援と協力を進めます」。

裾野市では、災害協定を結んでいる福島県相馬市と茨城県竜ヶ崎市に、震災翌日に駆け付け（相馬市には入れず）、3月19日には、前日議会で承認された義援金を届けに2市を再訪した。

静岡県東部、霊峰富士のふもとに広がる裾野市は、豊かな自然と温暖な気候に加え、企業誘致の成功により昭和58年以来現在まで、継続して地方交付税不交付団体を誇る自治体である。

平成6年に裾野市長に就任した大橋俊二氏は、少子高齢化の問題が顕在化する以前から将来を見据え「健康文化都市」を目指し、5期にわたって市民の暮らしやすさを第一とする政策に取り組んでいる。その根底には、四半世紀にわたり、延べ400万人の患者を診療し、地域医療に専心してきた医師としての経験があった。

首長と医師の2つの立場で、住民が安心して暮らせるまちづくりにかけたこれまでの市政を語っていただいた。

市民との対話から世の中が見えてくる

朝7時半、大橋俊二市長の姿は大橋内科小児科医院の診察室にあった。公務がない限り、毎朝30分は診療の時間に充てる。市長就任以来現在まで続く日課である。

「毎日、5～10人の診察をしますが、患者さんとの世間話は生きた情報です。何気ない会話、お母さん方の服装一つに、そのときの経済状況を見て取ることができ、市政のヒントが見えてきます」と大橋市長。

市民との対話を重視し、「ハイ！〝こちら市長室です〟」という「市民と語る日」も設けた。「わたしにはそんな気はないのだけれど、市長になったら近寄り難いと言われましてね。月1回、一人45分で市民の方から市政に対するご意見を聞く機会を設けました」。

幼くして母を病気で亡くし、小児科医である伯母に育てられた。そんな環境が大橋市長を医学の道へと導くこととなる。

昭和44年12月に小児科医院を開院。「伯母からは『居留守を使う医者にはなるな』と言われました。それは24時間体制の診療を意味します」。医者なら、時間など関係なく患者に責任をもとうと、正月も休まず診療に臨んだ。最盛期には、1日1000人以上、年間24万人を診たという。

診察室から市長室へ

病院の評判を聞いて遠方からも患者がやってくるようになったころ、医療行政に対する課題が見えてきた。「自治体によって乳幼児の医療補助やサービスが違うのです」。医療現場を経験した自分が地域のトップに立てば、次代を担う子供たちを安心して育てられる環境をつくることができると考え、市長の座を目指した。

畑違いの政治の世界に飛び込んだ市長を、議会は温かく迎え入れた。「最初の議会で質問をたくさん浴びたとき、議長が『医師から市長になったばかりですから、きつい質問は控えて』と言ってくれたほどです。わたしの福祉重視の施策の方向と議会の方向が同じだったからでしょうか、議会や市民の皆さんに助けていただいて今までやってきたようなものです」。

その後、議会との活発な議論が展開することとなる。

温泉施設から医療費無料化まで——健康づくりへの取り組み

市長選の公約の第一に掲げたのが「ヘルシーパーク」構想。温泉による市民の健康増進のための拠点づくりである。ここでは、議会においてさまざまな視点から意見が出た。中には「土地柄、わざわざ温泉を掘らなくても、近隣の有名な温泉地のサービス券を発行すれば済む」という意見もあった。しかし、高齢者には、身近に温泉があることが第一と、議会を説得。「温泉が出なければ市長を辞める覚悟でした。1200m掘っても出なかったときは焦りましたが、最終的に60℃の温泉が湧き、公約が守れた。妻には『あなたは運だけで生きている』と言われています(笑)」。リハビリもできるバーデプール(注)も備えた施設は平成14年に完成し、既に240万人以上に利用されている。

平成10年には、1歳半未満の乳幼児の医療費の無料化を、その後18年に小学校就学未満、19年には、中学校までの子供の医療費無料化を実現。「子供たちの医療費を無料にし、市民が安心して暮らせることが、わたしの念願でした」。

高齢者に対しても、70歳以上の市民への医療補助を実施している。

平成7年から7年かけて、市内全地区で学童保育も実施した。「時間がかかったため、最後に設置した地区のお母さんには『3人いる子供のうち、やっと1人だけ学童保育を利用することができた』と笑って言われました」。次いで平成17年には障がい児のための学童保育「めだか学級」を設けた。「障がい者に生きる力、自立できる力をもてる取り組みを考えています」と強く語る市長。今年12月には市役所内に障がい者が運営するパン工房と喫茶室が完成する予定。また、障がい者の自立支援のためのグループホームの建設も計画中である。

不可能を可能にする努力で市政を牽引

「国際関係学部の隣の北中学出身なので、日大は身近な存在でした」と言う大橋市長。医学部時代はひたすら勉強の日々を送った。

大学病院では当直をほとんど引き受け、下宿には週1回帰るかどうかの毎日。「当時の先輩は厳しかったですよ。『医者は午前2時、3時まで起きているのは当たり前だ』ってね。当直ではさまざまな先生の治療に接し、いろいろな症例に触れることができました。しかられながら鍛えられた。今のわたしをつくってくれた時代です」。

忙しい毎日、健康づくりに臥位(がい)15分を励行している。「横になると、肝臓に多くの血液が流れ、肝機能が高まります。市長室でも疲れを感じたときに、ちょっと横になる。おかげで睡眠時間は毎日2、3時間で十分です」。

市長就任の翌年、乳幼児から高齢者まで、すべての市民が健康で文化的な豊かさを享受でき、安全で安心して暮らせる「健康文化都市」を目指すと宣言した。

「不可能を可能にする努力をするのが人として生まれてきた使命です。人の意見に惑わされず、夢をあきらめずにがんばる。努力すれば必ず報われます」。その言葉どおり、「健康文化都市」は今、富士の裾野に広がっている。

(上)大橋市長の座右の銘は「持続への挑戦」。「『継続は力なり』といっても、継続するのは難しい。いかに持続させていくかが、継続につながります。そのための挑戦です」
(中)「怖い顔をしていたら小児科医は務まりません。優しくて若々しくしていないとね」と大橋市長、診察室にて
(下)裾野市民の健康づくりの拠点「裾野ヘルシーパーク」。富士山を望む天然温泉。温泉施設、バーデプール、休憩所を備えた日帰り温泉施設で、市民だけでなく誰でも気軽に利用できる（3時間500円～）

(注)バーデプール(Bade Pool)治療やリハビリテーション、健康増進のために、水中でストレッチやマッサージを行うプール。

わが町の先生

北海道札幌市

笑顔が印象的な藤田先生夫妻。開業以来、二人三脚で病院を拡充してきた。「勤務医を募集しています。日本大学の後輩の応募を期待しています！」と藤田先生

北の大地に夫婦で開業し20年
ペットの治療だけでなく飼い主の心もケア

札幌郊外・真駒内公園に程近い住宅地、澄川。藤田徹先生はこの地で獣医学科の同級生・浩美先生と2人で開業し、今年で20年になる。

「生まれ育った滋賀に近いところで開業しようとも思ったんですが、北海道が忘れられなくて。学生時代の研修や最初の勤務先に中標津農業共済組合を選んだんですが、すっかり北海道の人と大自然に魅了されました」と藤田先生。知らない土地での開業に不安もあったが、新しい住人を温かく迎える地域の人の大らかさもあって、当初から来院者は後を絶たず、ペットブームを背景にその数は年々増えているという。

「最近では、皆さん、ペットを家族の一員と考えていますから、わが子のようにかわいがっていらっしゃいます」。だから、ペットの病気に心を痛める飼い主のメンタルケアも獣医師の大切な仕事である。「飼い主様がどういう治療を求めているのかじっくり話を聞き、治療法を納得できるように説明し、飼い主の方に安心していただくことが、実は肝心なんです」。

そう熱く話す藤田先生。今日もの言わぬ動物の痛みに耳を傾け、人の痛みに手を差し伸べている。

夫婦で始めた病院も今では総勢10人のスタッフを抱えるまでに成長。最新で高度な治療技術を学ぶため若い獣医師が集まってくる

札幌緑が丘動物病院

院　長　藤田　徹先生

昭和60年大学院獣医学研究科博士前期課程修了

副院長　藤田 浩美先生

昭和60年大学院獣医学研究科博士前期課程修了

（ふじた・とおる）昭和36年滋賀県生まれ。本学大学院修了後、中標津農業共済組合に勤務。その後、大阪市内の病院で小動物を専門に診療する。平成3年、札幌緑が丘動物病院を開業。飼い主の心に届く診療がモットー。今後は飼い主のマナーや動物セラピーの啓発に力を入れるとともに、引き取り手のない動物を受け入れるシェルターづくりを目指している。

（ふじた・ひろみ）昭和35年福岡県生まれ。本学大学院修了後、大阪の動物病院に獣医師として勤務。結婚を機に札幌緑が丘動物病院を徹先生とともに開業する。現在は、病院運営を取り仕切り、夫の仕事をサポートしている。

桜縁グラフ

女子フェンシング選手
荻根澤 Ogineazawa 千穂 Chiho

（NEXUSフェンシングチーム所属）

平成2年大会出場

（おぎねざわ・ちづる）昭和61年埼玉県生まれ。高校入学後、先生の勧めでフェンシング部の練習を見て「カッコいい！」と思いフェンシングを始める。高校3年のとき、地元埼玉県（フェンシング会場は自宅のある蓮田市）で開催された国体に出場し、団体戦6位。同年のインターハイ同3位。本学入学後は、高い身長と身体能力を生かせるサーブル種目を専門とし、4年のとき、団体戦で全国学生王座決定戦やインカレなど学生タイトルを総なめ。個人戦でもインカレ準優勝。一昨年のW杯ドイツ大会個人戦ベスト16。

支援してくれた校友への感謝とともに
ロンドン五輪の夢舞台に挑む

フェンシング選手の夢は、スポットライトに照らされた舞台のような競技用コート（ピスト）で試合をすること。それは、五輪や世界選手権、W杯など大きな大会で勝ち抜いた数人の者たちだけに許された晴れ舞台であり、すべての観客の視線が戦う2人の選手に注がれます。わたしもロンドン五輪でこんな夢舞台に立ちたいと、今はW杯を転戦中です。

フェンシングは日本ではまだまだなじみの薄い種目で、競技生活を続けるのは大変です。でも、わたしは日本大学のフェンシング部OBや校友の方々の支援を受け、練習や試合に集中することができました。ロンドン五輪には、これまで支援してくれた母校とその関係者の方々への感謝と一緒に出場したいと思います。応援よろしくお願いいたします。

アスリートの引退。そして新たな挑戦へ！　特別企画

ソウル五輪銅メダリスト
田中ウルヴェ京さん
対談 × 清水宏保さん
長野五輪金メダリスト

田中ウルヴェ京さん
平成元年文理学部体育学科卒業

清水宏保さん
平成8年文理学部体育学科卒業

日本のスポーツ界にはないライフプランの中の競技生活スポーツのビジネス化が社会貢献につながる

トップアスリートとして世界のひのき舞台で活躍した選手も、いつの日か迎える「引退」の二文字。心と身体の限界まで自分自身を追いつめ、練習や試合に励んだ日々から指導者へ、あるいはまったく別のフィールドへと進む。進路はさまざまであるが、スポーツ選手の引退後の人生は、社会的ステータスやアイデンティティーの喪失感との闘いでもある。

オリンピックでメダリストの栄冠に輝いた田中ウルヴェ京さんと清水宏保さんは、選手生活を終えた後、現実とどのように向き合い、新たな目標をつかみ取り、さらなる挑戦へと歩み出していったのか、お2人に語り合っていただいた。

「引退」という不安

田中　競技生活以上に長い付き合いになる「引退後の人生」について、現役時代に不安や悩みはありましたか？

清水　オリンピックで金メダルを取ったとはいっても、競技生活をやめた後の生活には、やはり不安がありました。

現役時代は、セカンドキャリアについてきちんと計画を立てないといけないと思いながらも、なるべく考えないようにしていました。田中さんはどうでしたか？

田中　「メダリストになる」ということが目標でしたから、銅メダルでもすごくうれしかった。

引退後は、代表チームのアシスタント・コーチをやっていましたが、いろいろな場面で自分の至らなさを感じ、逃げるようにアメリカに渡ったのが24歳のときですね。そこで出合ったのが心理学でした。

清水　ぼくはスピードスケートのことはやり尽くした感があったので、指導者になるにしても、人間性や社会性を高めてからでも遅くはない、と考えて大学院で研究することを選びました。

競技生活は人生の通過〝点〟

田中　アメリカでは、「わたしはたかだかメダリスト」ということを思い知らされました。自己紹介でシンクロの銅メダリストだと話すと、「それってすごいね」と驚いてくれますが、「ほかに何をやっていたんですか」「これからどうするんですか」と、今後のキャリアについて聞いてくるんです。

欧米のアスリートにキャリアデザインを書かせると、まず1本の線を引き、その線のかなり下のほうに「点」を付ける。この点は金メダルだと言うんです。そして、「メダルを取ったら次は……」と、引退後のライフプランについて語ります。彼らにとって競技生活は、人生の通過〝点〟にすぎないんです。

日本人選手に同じことをやらせると、1本の線を引いて「ここでメダルを取りまして」と、ここまでは同じなんですが、この後が違うんです。「次は」と、もう1本別の線をゼロから引きはじめてしまう。「あなたの人生はずっとつながっているんですよ」と言うと、「選手としてはここまでだったんで」と答えるんです。

清水　海外を転戦する中で、欧米の選手から「メダルはステップだ」という話をよく聞きましたが、ぼくもそのとおりだと思います。

田中　日本人選手はよく「引退すると人生をリセットしなければならない」という言い方をします。社会的ステータスやアイデンティティーの喪失感からでしょうが、リセットする必要はないんです。競技生活の間に普通の人には培えないライフスキルをはぐくんできたわけですから、努力すれば短期間で、新しい可能性を開拓していけるんです。

清水　人生もスポーツも同じなんですよね。スポーツでは戦略や目標設定などがありますが、これは誰にでも立てられる目に見える部分です。しかし、最終的に勝敗につながるのはこうした表面的な部分ではなく、内面的な部分、つまり思考やメンタリティーです。

田中　清水さんが金メダルを取ることができたのは、そうした内面的な部分が、ほかの選手より優れていたということですね。

清水　そうですね、ほんの少しだけですが。現役時代、自分の決めた目標に向かって一生懸命努力したことで、ぼくは内面的な力を高めることができたと思いますし、このことはぼくの人生にとって大きな財産です。

引退後、1年間は考える時間に充て、目標づくりをしました。小さいときからぜんそくを抱えていますから、ぜんそくの啓発活動も含めた総合医療、融合医療の仕事に関わることを一つの目標にしたのです。

田中　人生を戦略的に考える姿勢は、競技生活ではぐくまれたのですか？

清水　はい。子供のころから父に

常に戦略的に考えることを教えられましたから、一つの試合に勝つと、その日の夜には次の試合に向けて反省点や練習方法を考えていました。オリンピックでメダルを取った次の日には、もう4年後に向けて準備を始めていました。

社会で生きるスポーツでの経験

田中　たぶん、清水さんはストレスが大好きじゃないかと思うんだけど(笑)。そうでしょ。わたしなんか「ストレスを軽減したいんです」なんて言われると、ブチッと切れそうになるときがある。昨年、わたし、がんになったんですが、そのとき「わっ、がんか！　神様、良いお題をありがとうございます」と思ったんですよ。ストレスも、考え方一つで何とでもできるというのがアスリートのすごいところですよね。

清水　そうなんですよ。ぼくも現役時代、壁にぶち当たると、「あっ、これでもう1回自分が成長できるな」と思いました。成長のためのチャンスがやってきたんだと。そうやって競技環境をすべて自分でつくりあげてきました。

プレッシャーから解放される方法や、筋肉を強化する方法も、毎日の練習の中で自ら編み出したんです。コーチや監督から「答え」を見せてもらったわけではありません。自分なりの「答え」を見つけ出すまでには試行錯誤や失敗、新たなチャレンジと、大変なことの連続でしたが、その大変さが楽しいし、競技を続ける刺激にもなっていました。

田中　アスリートの精神的タフさや逆境に対処していく方法は、引退後にも社会で必ず生かせるはずですよね。

ビジネスとしてのスポーツが社会に貢献

田中　清水さんはアスリートなら誰でも夢見るオリンピックの金メダリストですが、その名声を利用して引退後のライフプランを考えませんでしたか？

清水　田中さんが一番お分かりのはずでよ。金メダルの賞味期限はそんなに長くないじゃないですか。そんな過去の栄光にすがるのではなく、スポーツ選手が競技生活で培ってきた知識や経験を今、社会に対して問うタイミングに来ていると思います。

アマチュアのスポーツ選手は、メダルを取っても国から300万円の報奨金が出るだけです。1年間の競技活動費は、海外を転戦すると軽く1000万円を超えますから、ぼくの現役時代は資金的には常にぎりぎりの状態でした。

田中　そんな現実では、子供たちに「スポーツをやっていても、将来はないね!?」と思われてしまいますね。現役時代にプロ宣言したのもそういう理由からですか。

清水　JOCに所有権があったぼくの肖像権を、ぼく自身が自由に使えるようにするためでした。JOCに肖像権がある場合は、アスリートの映像がCMに使われても200万円程度しか報酬を得ることができません。プロなら10倍以上の肖像権使用料が直接入ってくるようになるのです。つまりプロになれば稼げるんです。

田中　アスリートが自分の活動費や遠征費用を稼ぎ出しながら、ちゃんと結果も残す。しかも、引退後の生活に困らないような、ある程度の蓄えまでできるということが日本でも可能になれば、子供たちに大きな希望と夢を与えることになりますよね。

清水　そうです。アスリートがその能力に応じて収入を得ることが当然のことと思われる環境にしていくことが、スポーツ界の底辺を押し広げることになり、さらにはスポーツ界全体の活性化につながるのではないでしょうか。

田中　活動資金の確保に悩まされていたのでは、記録や勝利どころではありませんよね。

清水　そもそも、プロとアマの違いがあるのは日本だけなんです。この線引きも間違いです。選手が自主的に活動できる環境をつくりはじめなければならない時期に来ていると思います。

田中　日本ではスポーツ選手の社会貢献＝ボランティアという定義を変えていかないといけない。実は、アスリートがお金を稼ぎ出すことが、子供に夢を与え、スポーツ界の発展を支えていく一番の社会貢献ですと。

清水　そうなんですよ。日本では、スポーツ選手はお金を稼いではいけないという認識が強いんです。

田中　「アマチュアとは、アスリートとはこうあるべきだ」といった、日本の考え方がそう簡単に変わるとは思えません。けれども、日本のスポーツ界や応援していただいた社会への恩返しのためにも、アスリートを取り巻く環境が少しでも良くなっていくように、お互いの道で常に挑戦を続けながらがんばっていきましょう。

（しみず・ひろやす）昭和49年北海道生まれ。本学1年生のとき初出場したスピードスケートW杯で初優勝の快挙を達成し、注目を集める。平成10年、長野五輪のスピードスケート500mで日本人選手として同種目初の金メダルを獲得。同1000mでも銅メダル。4年後のソルトレイクシティ五輪では500mで銀メダル。6年のリレハンメルから18年のトリノまで、4度五輪に出場し、すべての色のメダルを獲得。昨年3月に引退。今年4月から本学大学院グローバル・ビジネス研究科に入学し、医療経営を研究している。

Hiroyasu Shimizu

平成10年、長野五輪・スピードスケート男子500メートルで金メダルを獲得し、日の丸を手に観客の声援にこたえる清水さん

Photo : Kyodo News

（たなか・うるう゛ぇ・みやこ）昭和42年東京都生まれ。本学在学中の昭和63年、ソウル五輪シンクロにおいて小谷美可子さんとのデュエットで銅メダル獲得。五輪後に引退。平成3年に渡米。セントメリーズ大学院でスポーツ心理学を専攻し、修士課程修了。11年からは米国で認知行動療法、スポーツカウンセリングなどを学ぶ。13年に心と身体の健康をテーマに起業。（株）MJコンテス取締役。五輪選手から一般に向けてメンタルトレーニングの指導や企業研修、講演に活躍。著書・訳書多数。

Miyako Tanaka Oulevey

昭和63年、ソウル五輪・シンクロデュエット決勝で銅メダルを獲得した演技。奥が田中さん、手前が小谷さん

イラスト／なかだ えり

ナマハゲ
（秋田県男鹿半島）

ナマハゲ●大晦日の夜、男鹿半島全域で行われる民俗行事。由来には、漢の武皇帝説、西洋人説、修験道説など諸説あり定かでない。恐ろしい形相の面をつけた"鬼"が、各家庭を巡り、厄災をはらい、吉事をもたらす。鬼の面は各集落で工夫され、木彫りの顔に海藻で髪をつけた恐ろしげなもの、竹ざるを使ったユーモラスなものなどさまざま。観光行事として、毎年2月の第2金～日曜日には「なまはげ柴灯（せど）まつり」が真山（しんざん）神社で催されている。昭和53年、国の重要無形民俗文化財に指定。

山から下りてきた鬼が、怠け者・きかん坊をいさめる 秋田・男鹿半島の大晦日の伝統的民俗行事

佐藤 光生さん
昭和43年商学部会計学科卒業

（さとう・みつお）昭和20年秋田県生まれ。本学卒業後、秋田市内の広告代理店に勤務。その後、父親から秋田魁新報船川販売所の経営を受け継ぐ。地元青年会のメンバーが務めるナマハゲ役を一度はやってみたかったが、それには振る舞われる酒を次々と飲めなければならない。「酒がまったく飲めない」ため、残念ながらおどかされるばかりで、おどかす役はできずじまいだったと笑う。

「怠け者はいねがぁ、泣ぐ子はいねがぁ」という大声と襖を乱暴に開ける音が聞こえると、押入れに一目散。ナマハゲに見つからないよう、体を丸め、息をひそめたものです。それほど怖くてね。ナマハゲが人間だなんて、小学校の高学年になるまで知りませんでしたよ。

大晦日の夕刻、先立と呼ばれる人が、ナマハゲを家に入れていいか聞きにきます。やってくるのは赤鬼と青鬼。手には包丁と手桶。隠れていた子供を見つけると恐ろしい形相で「親の言うごと聞ぐかぁ!? 良い子にしているかぁ!」といさめます。そして、家の主人に元旦用のおせち料理や酒を振る舞われると、ナマハゲはやっと、次の家へと去っていきます。よほど怖いのか、男鹿の子供に「言うこと聞かないと、ナマハゲが来るぞっ!」としかれば、今でも一発でおとなしくなります。

最近では、玄関先までで家の中までナマハゲが入ってくることは少なくなりましたが、わたしたちにはなくてはならない大晦日の行事です。

男鹿半島は、ナマハゲにまつわる見どころはもちろん、奇岩が並ぶ海岸線と美しい海など神秘と景観美にあふれ、しかも新鮮な海産物が豊富。ぜひ、男鹿半島を旅してみてください。

なかだ えり／平成9年生産工学部建築工学科卒業。イラストレーター。

トップの肖像

食品トレー製造のトップメーカーは人と環境へのやさしさでもトップを走る

株式会社エフピコ 代表取締役会長兼最高経営責任者 小松 安弘さん
昭和35年経済学部経済学科卒業

（こまつ・やすひろ）昭和12年岡山県生まれ。本学卒業後、都内の会社に2年間勤務後、昭和37年福山パール紙工を設立し社長に就任。平成元年エフピコに社名変更し、食品トレー製造の国内トップメーカーに育て上げる。17年東証一部上場。21年6月、社長の座を2代目に譲り、現職。9年、食品容器業界に対する貢献により藍綬褒章、11年に第19回毎日経済人賞およびリサイクル推進功労者表彰において内閣総理大臣賞、23年には第9回渋沢栄一賞を受賞。経営の信条は「忍（がまん）」。「好調なときこそ油断が入り込まないよう我慢する」ことだという。

スーパーマーケットやコンビニの売り場に所狭しと並ぶ食品の数々。これらは、食品加工会社からスーパーに納入され、陳列棚に並び、消費者の手に取られてレジを通って袋に揺られ、家庭の食卓や冷蔵庫に収まる。そのすべてのプロセスの安全・衛生・鮮度を守っているのが食品トレーである。食品トレーがなければ、今日の食品の大量流通は不可能だったろう。エフピコは、この食品トレー製造で国内シェアの6割を占めるトップメーカー。売上高1400億円超、消費低迷による不景気の中、今年3月期も過去最高益を更新した。従業員3600人超の先頭に立つのは小松安弘会長。弱冠24歳で同社を立ち上げ、以来50年、一代で業界最大手に育て上げた傑物である。

スタートは1台の手動成型機

白い衛生服に身を固めた作業員がベルトコンベアの前に並び立ち、流れ来ては流れ去る食品トレーの選別をテキパキと行っている。彼らは、エフピコが雇用する障がいをもつ人々である。作業の手際の的確さとスピードは健常者のそれをしのぐほど。エフピコとはどういう企業か、その説明には千の言葉を尽くすより、工場のこの光景を見るとよい。同社はリサイクル事業を通して先進的な環境経営(注)に取り組む優良企業であり成長企業であって、それだけではない。〝人格〟を感じさせる企業なのである。エフピコの〝人格〟を陶冶(とうや)したのが、創業者で現会長の小松安弘さん、その人である。

小学1年のとき父が他界、この境遇が少年期の小松さんの心に独立の気概を養った。折しも終戦後、日本は輝く未来を求めて復興から成長へとエンジンをふかした。感性豊かな少年もまた脳裏のキャンバスに将来の夢のあれこれを思うさまを描いた。「将来は、こんなすごい科学技術が開発されて、日本や世界はどんどん変わるんだよ」。そんな話を夢中で語り、「おまえは夢のような大きな話ばかりする」と周りをあきれさせた少年は、先々を読む勘の鋭さと独立心に磨きをかけ、やがて新しい時代の扉を開く鍵に出合う。

帰郷して起業のヒントを探していた24歳のときのことである。「アメリカでこんなものがはやっている」と知人から見せられたのは、発泡スチロールの容器だった。持ち前の勘がピクンと動いた。「日本でもはやるに違いない!」。即断即決即行動。小松さんは農機具会社の工場を借り、エフピコの前身となる福山パール紙工を興した。

工場に置かれたのはたった1台の手動式機械。シート状の原料を機械に挟んで加熱し、ブザーが鳴ったら引き出す。成型したシートは家に持ち帰りハサミとカミソリで一つひとつ切り抜く。来る日も来る日もこの作業に明け暮れた。

カラートレー製造で飛躍

創業して数年後、欧米育ちのスーパーマーケットが日本に上陸、またたく間に全国へ広がった。発泡スチロール製食品トレーの需要は急騰し、同社の売上高は毎年2けた増で伸びた。しかし、好調の頂点で突如、石油ショックに見舞われた。業界はすさまじい値引き競争の渦に突き落とされた。

「価格競争の泥仕合から抜け出したい一心で、画期的な製品のアイデアを考え抜きました」。四六時中考え、トレーは睡眠中の夢にも現れた。思い付いたのがカラートレーだった。食品トレーといえば白無地の汎用量産品が常識だった時代、「余計なことをするな」と業界から突き上げられたが、屈しなかった。小松さんの提案を受け入れ、多種多様なカラートレーに食材を盛り付けたスーパーでは異変が起きた。売れ足の鈍かった食材が、カラートレーに衣替えすることでにわかに売れ出したのである。トレーの色合い、デザイン、機能がいかに売れ行きを左右するか、市場の誰もが認めざるを得なかった。

(注) 環境経営とは、企業と社会が持続可能な発展をしていくために、地球環境と調和した企業経営を行うという考え方

先見の自社物流網整備と逆転のリサイクル

カラートレーの好調を追い風に、小松さんはまた一つ、先駆的な取り組みに打って出た。トレーは低単価で、かさ高なため物流費がかかる。「それなら」と、物流網を自前で整備したのである。設備投資は膨大で、リスクの大きさに周囲の反応は冷ややかだった。

「でも、このときの決断は間違っていませんでした」と小松さん。事実、全国に張り巡らせた自社物流網が威力をフルに発揮する機会が数年後にやってきた。いや、やってきたのではない。またもや小松さんの先を読むひらめきと決断がそれを呼び込んだのである。平成2年に小松さんが開始したリサイクル事業がそれである。

このとき、食品トレー業界は、業界全体の基盤を大きく揺るがす危機に直面していた。大量廃棄されるごみが社会問題化し、発泡トレーがそのやり玉にあげられたのである。トレー不要論が吹き荒れる中、小松さんは「それなら、ごみにせずにもう一度製品にしよう」と決断、これがリサイクル事業の始まりとなった。

「使用済みトレーの回収を納品後の空車が行う。納品に行く車を〝動脈〟とすれば、帰り車は回収トレーを満載した〝静脈物流〟。このような省資源・省廃棄・省エネルギーの物流体制は自社物流があったからこそできたのです」。

環境と福祉のマッチング

同社のリサイクル「トレーtoトレー」は、消費者がスーパーのリサイクルボックスに返した使用済みトレーを同社が回収、原料に戻して再生トレーをつくる世界初の循環型トレーリサイクルである。環境問題の解決と同時に原料調達にも成功、マイナスをプラスに逆転してみせたが、小松さんのひらめきはまだ続く。

このリサイクルに障がい者雇用をつなげたのである。「環境負荷を減らしながら、障がい者の皆さんに生きがいを感じていただける。経済価値には換算できない大切なことだと思っています」。同社は現在、障がい者雇用数667人で、障害者雇用促進法の法定雇用率1・8%をはるかに超える16・1%を実現している。同社が〝人格〟たるゆえんがここにあるが、小松会長は首を横に振る。

「この程度の成功は成功ではありません。目標はまだはるか高みにあります」。会長にとっては、同社の〝人格〟の陶冶と少年期の夢はまだ道半ばのようである。

企業データ

「エフピコ」の社名は、創立時の社名「福山パール紙工」のF(福山)、P(パール)、Co(コーポレーション)を組み合わせたもの。現在、全国に13の製造工場、6つのリサイクル工場、8つの配送センターを展開。資本金131億5000万円、売上高1407億円(平成23年3月期連結)、従業員数3,666人(平成23年3月連結)。

1 2 健常者とともに働く障がい者の人々=エフピコの障がい者雇用は、エフピコが設立した特例子会社(株)ダックスによるダックス事業(特例子会社とは、障がい者の雇用に特別の配慮をした子会社)、障害者自立支援法の就労継続支援A型の事業者指定を受けて設立したエフピコ愛パック(株)による愛パック事業の2つを中心に行われている 3 工夫が光る多彩なカラートレー=現在、同社のトレー製品数は6000種類以上、毎年1000種類もの新製品をコンスタントに投入し続けている。持ち帰りに傾けても寿司の型崩れを防ぐため底に突起を設けた寿司容器、断熱性・保温性・対衝動性を備えた新素材でつくられた軽量弁当容器、開けやすいのに汁漏れがしにくい容器など目的に合わせて同社のアイディアが詰まっている 4 スーパーに設置されたトレー回収箱。6店舗でスタートした回収拠点は現在7900拠点に拡大 5 エコトレー(再生トレー)=平成3年に業界初のエコマーク商品に認定され、12年に商標登録された。日本で流通しているトレーの5枚に1枚をエコトレーが占める 6 本社ビル=1階はすべて駐車場で、2階以上がオフィス。臨海部に立つ本社はかつて洪水で1階が浸水被害を受けた経験があり、「これもリスク管理の一つ」と小松会長

学校の先生

中学生のころ、クラス内で起こったいじめ問題。そのときの先生の対応に疑問を感じ、「将来、自分が教員になって生徒の力になりたい！」と思った福田由紀さん。来年に控えた教育実習に思いを巡らすうち、リアルな教育現場の様子に興味がわいてきた。生徒を引き付ける授業、環境づくりの工夫、そして良い教師になるために今できることは…。次々あふれる疑問を抱えて、教育の大先輩・立岡康徳先生の元へ！　先輩は温かく貴重なアドバイスをたくさん与えてくれた。

生徒に寄り添い、とことんまで付き合う自立して生きる勇気を持たせ、背中を押してやるのが教員の役目です

千葉県市川市立第五中学校教頭
立岡 康徳さん
昭和53年経済学部経済学科卒業

（たておか・やすのり）昭和30年千葉県生まれ。本学卒業後、ブラジルへ渡り、クラブチームの練習生としてサッカー一色の日々を過ごす。帰国後、日大習志野高校で非常勤講師に。その後、教員採用試験に合格し、中学校の教員となる。担当教科は社会と国語。サッカー部の指導を担当。毎年、市川市を中心に選抜された15歳以下の生徒をブラジルへ引率し、現地のチームと試合、交流を行うなど、サッカーを通しての教育に力を注ぐ。将来はブラジルでボランティア活動をするのが夢。

生徒の心に寄り添うことが教育の第一歩

——まずは、立岡先生が教員になりたいと思ったきっかけを教えていただけますか？

ぼくも福田さんと一緒で、中学時代の先生の影響が大きいんですよ。松戸の中学校だったのですが、けっこう荒れていましてね。ぼくも含めてやんちゃなヤツが多かったので、先生方にガミガミと怒られていました。

けれども、3年生のときの担任の先生は違っていて、怒鳴ったり殴ったり、力で押さえ付けようとはせずに、とても静かに、言葉少なに諭すんです。すると、ぼくらは直立不動で「すみません。悪かったです」って謝まっちゃう（笑）。先生の醸し出す雰囲気がそうさせたんでしょうね。常に揺るぎない存在自体がとても信頼できました。そのころに「先生の仕事っていいな」と、漠然と思ったのが今につながっています。

——すてきな先生ですね！　わたしは頭ごなしにしかる先生にしか出会ったことがないのですが、そういう先生についてはどう思われますか？

若い先生は特に勢いがあるから、そういう対応になることもありますよね。でも、それが一概に悪いわけじゃない。若いうちは情熱や勢いがあり、そのエネルギーが生徒を引き付けて引っ張っていくという良い面があります。その一方で、ベテラン教員が豊富な経験に基づいた落ち着いた対応で生徒指導に当たることができれば、両者のよい部分がミックスされて、学内の指導効果が上がるのではないかと考えています。まあ、偉そうなことを言っても、ぼくもいまだに「こうすればよかった…」と反省することが多いんですけどね。

現場に立つと、机上の教育理論だけでは太刀打ちできないことがほとんどです。生徒たちの中には家庭的に問題を抱えている子もたくさんいます。教員としては、常に彼らに寄り添い、話を聞き、共感してじっくり付き合うことが大事だと感じています。

生徒を褒めて引き上げる！
これがぼくのやり方です

——今「寄り添う」とおっしゃいましたが、そのような教育を意識した具体的なエピソードがあれば、ぜひ教えてください。

以前、勤務していた中学校で担任したクラスに、金髪に学ランで日常態度も目に余る女子生徒がいました。ずいぶん対応に悩みましたが、根気よく付き合ううちに、彼女が荒れているのは父親から受けている暴力が原因だと分かったんです。卒業目前に彼女は事件を起こして鑑別所に入ったのですが、面会に行くと決して泣かなかった子がぽろぽろと涙を流して「ありがとうございました」って言うんです。あれは彼女が心を開いてくれた瞬間だったと思います。その後は定時制高校に進み、ぼくが転任するときも、わざわざ会いにきてくれました。

そのほかにも、母親の育児放棄による不登校やいじめなど、問題を抱える多くの生徒たちと接してきましたが、どのような場合でも生徒の話を聞き、共感し、とことん付き合うことを心掛けてきました。大事なのは、社会で自立して生きていくための勇気をもたせ、やさしく背中を押してやること。それが教員の大切な役目だと思います。

褒めること・環境づくりが生徒の力を伸ばす

——生徒への対応はもちろんですが、時として保護者への対応も必要になりますよね？

おっしゃるとおり、保護者にも現状を把握してもらい、対応を求めなくてはいけません。しかし、なかには「わたしの中学時代もこうでしたから、これでいいんです」と言い切る保護者もいる。でも、教員としてそこであきらめるわけにはいきません。1回がダメなら5回、5回がダメなら10回、相手が音を上げるまで伝える努力をするべきだと考えています。

——先ほど、先生の国語の授業を拝見しましたが、先生も生徒も笑顔が多くてとても明るい授業風景でした。何か工夫されていることはありますか？

褒めることですよ。わたしは「30％理論」と呼んでいるのですが、30％しかできない生徒に「なんでできないんだ」ってしかれば、30％が20％に目減りしてしまう。それだったら、良いところを見つけて褒めながらアドバイスを与え、35％になれば5％分、教員の負担が軽くなるわけです。これは決してラクをするためではありません。その分のエネルギーを教材研究や生徒と向き合う時間に費やすことができれば、教育の質は確実に向上するわけです。生徒たちに「絶対できるようになるから！」と安心感を与え、今いる場所から少しでも引き上げてやることが教員の大事な役割なのではないでしょうか。

もう一つ心掛けているのが、環境づくりです。例えば、生徒が帰った後に、机といすを縦横きちんとそろえたり、流しを洗ってきれいにしたり。また、これまで新しい中学校に赴任するたびに、最初

先生の授業は笑顔が多くて
明るいですね！

の仕事として校舎のペンキの塗り替えをしてきました。学校が汚れていたら落書きもするし、ごみも落とす。「環境が人をつくる」と言いますが、まったくそのとおりだと思いますよ。

意欲と情熱があればいい技術は現場で培われるもの

——実は、不景気が原因で安定を求めて教員を目指す学生が増えているのですが、そのような動機についてどう思われますか？

確かに、安定しているかもしれませんが、そのような動機だけでは続けていけないと思います。公立学校の教員は公務員ですが、9時から5時というわけにはいきませんし、想像以上に仕事の幅が広い。現場では日々予期せぬことが起こりますから、時間はあってないようなものなんです。安定を望む以上に情熱がないとなかなか勤まらないのではないでしょうか。

担任をもっていたころは、コミュニケーションを図るために学級通信を配布。教頭になった今は職員室通信「デイリー・ジェームス」を発行。他愛のない話題に、先生方に周知徹底したい内容を盛り込むことも。ちなみに「ジェームス」は、最初に赴任した学校で生徒が付けてくれたニックネーム

ブラジルのクラブチーム時代の写真。
右から2番目が立岡先生。一番左がアマラオさん

——最後に、どういう学生時代の過ごし方が良い教師への道につながるでしょうか？

そのように真摯（しんし）に考えている時点で、既に良い教師への道を歩みはじめていますよ！　ぼくなんて学生時代はひたすらサッカーざんまいでしたからね（笑）。実は、大学卒業後もすぐに教員になったわけではなく、ブラジルに渡ってサッカーのクラブチームで2年間練習生をしていたんです。のちに日本で活躍するアマラオとも合宿所が同じだったんですよ。このころを含め、ずっとサッカーを続けてきたことで、人との輪が広がり、人との付き合い方、礼儀なども学びました。それらは教員生活でもしっかり役に立っています。その人脈でジーコとも知り合い、彼の協力を得て始めた、市川市の15歳以下の選抜メンバーをブラジルに引率する企画を十数年続けています。サッカーを続けてきた経験から「継続と努力は大事だよ」と生徒たちに胸を張って伝えることができます。皆さんも学生時代には何か一所懸命打ち込めるものをもつといいですよ。

教員になるためには、子供が好きで、意欲があれば十分。具体的なことは現場で生徒たちと過ごす中で磨かれていくことですからね。情熱といろんなことに取り組む意欲、そしてどんなことでも受け入れていこうという謙虚な気持ちをもってがんばってください。

——お話を聞いて、教員になりたいという気持ちがさらに強くなりました。継続、努力、そして生徒とのコミュニケーションを大切にして、わたしも先生のような魅力的な授業ができる教員になれるようにがんばります。

福田由紀さん
経済学部経済学科3年

インタビューを終えて

寄り添う教育——わたしが目指す教育の形はこれです。今回、立岡先生のお話を聞いて、生徒の未来を伸ばすには、教員と生徒が共に成長できる教育現場が大切なのだと教えていただきました。

教員を目指す上での不安がたくさんありましたが、立岡先生の教員としての在り方や、生徒に対する優しいまなざしを見ていたら、不安を自分の中でどんどん増大させるより、教員になるための努力をする時間をつくりたいと思いました。立岡先生、ありがとうございました。

学校の先生

教員はクリエイティブな仕事 自ら考え、人生を楽しむ力をはぐくむのが教師

大学では教職課程をとっていたものの、将来はマスコミ業界を志望していました。しかし、教育実習で生徒たちと接して考えが一変！　彼らの発想はユニークで、教室では教師と生徒が互いに刺激し合っている。「教員はクリエイティブな職業なんだ」と気付きました。

教員になって感じたのは、授業以外の仕事が多いこと。事務作業や組合の仕事、部活動の指導など、仕事の幅が広いことに驚きました。

演劇部の顧問になったのは15年前。「高校演劇の甲子園」といわれる高文連演劇発表大会の地区大会に挑戦してきましたが、なかなか全道大会まで進むことができませんでした。それが昨年、自作の脚本・演出の作品で地区、全道と駒を進め、春季全国高等学校演劇研究大会の舞台での上演を果たしました。うれしかったですね。生徒たちも達成感を得られたと思います。

全国大会出場というと厳しい指導を連想されますが、わが部はいたって自由。大会が近づけば休日練習もしますが、基本はやれるときに集まっています。指導で心掛けているのは、自分で考えて自主的に行動する力を付けること。そして、人にはさまざまな見方、考え方があることを学んでもらうことです。

教員はダイレクトに喜怒哀楽が返ってくる仕事なので、大変なこともありますが、それもまた楽しい。教員を目指す皆さん、先生が楽しそうじゃなければ生徒は未来をつまらなく感じるはず。生徒に希望ある人生を語れるよう、広い世界に目を向けて楽しさを追求していきましょう。

（左）新作『死神』のけいこ。新作は生徒が脚本と演出を担当（下）全道大会で優秀賞を受賞した『生徒講評委員会』。全国大会出場は生徒たちに大きな自信を与えた

私立帯広北高等学校教諭
加藤 真紀子さん
平成5年芸術学部演劇学科卒業

（かとう・まきこ）昭和45年北海道生まれ。本校卒業後、帯広北高校に国語科担当として採用される。平成8年から演劇部を指導。自作の脚本5作目で高文連十勝地区演劇発表大会、全道高等学校演劇発表大会と次々に勝ち抜き、第5回春季全国高校演劇研究大会出場を果たす。日ごろの教育活動が認められ、十勝キャリアデザイン大賞2011・社内キャリア部門入賞。生徒のコミュニケーション能力、考える力を培うワークショップをデザインすることに興味があり、目下勉強中。

全校児童と教職員全員が集合。子供たちは先生方の愛情に包まれて、今日も明るく元気いっぱい

学校の先生

小・中・高の教員を務め 初等教育の重要性を実感

和歌山県かつらぎ町立四郷小学校教頭
田中 秀和さん

昭和58年文理学部史学科卒業

（たなか・ひでかず）昭和35年和歌山県生まれ。本学卒業後、京都の大学で小学校の教員免許取得。県立高校講師を経て、昭和61年、採用試験に合格し中学校教諭に。職務の傍ら、日大吹奏楽研究会での経験を生かし、吹奏楽部の指導に当たる。前任校で吹奏楽から離れるまでの13年間、和歌山県吹奏楽連盟の副理事長を務める。好きな言葉は「希望はすべての人の母である」。こうしたいという気持ちがないと人は前へ進めないよと、毎年巣立つ子供たちにこの言葉を贈っている。

地元で小・中学校の教員をしていた叔父が、幼いわたしをよく職場に連れて行ってくれました。その影響から、大学に入る前には教師になると心に決めていました。「社会科の教員は採用が少ないからやめておけ」と叔父に言われたのですが、どうしても大学で歴史を学びたくて史学科を選びました。

卒業後は和歌山に戻って高校の教壇に立ち、その後、中学校・小学校と教員経験を積んできました。昨年から勤務している四郷小学校は全校児童が25人の小さな学校ですが、人数が少ない分、児童たちとの接点が多く、保護者の顔もよく見えて、トラブルが起こりにくいという利点があります。あえて大変なことをあげれば、町の人との付き合いでしょうか。祭りのときはお酒の強いご老人たちのお相手で大変です（笑）。

28年間の教員生活から強く感じるのは初等教育の重要性です。将来子供たちは社会に出るわけですが、その際、人とどう関わっていくか、どうすれば強い心で生きられるかなど「人づくり」の基礎を身に着けるのが小学校です。ここが駄目だとその先を積み上げられない。勉強は学校でなくてもできますが、「人づくり」は学校でないとできない。中・高の教員を目指している学生さんも、教育の出発点である初等教育の現場はぜひ見ておいてください。そして、教員に大切なのは〝ハート〟。ハートのない先生に子供は付いていきません。いろいろな経験をして心を磨き、相手を思いやれる教員になってください。

町内の小学校の統廃合により、本年度で廃校となる四郷小学校。明治8年から続く136年の歴史に幕を下ろす

学校の先生

一歩一歩の成長を応援し「生きていける力」をはぐくむ

新潟県見附市立見附特別支援学校校長
小山 真樹さん

昭和54年理工学部工業化学科卒業

（こやま・まさき）昭和31年新潟県生まれ。本学卒業後、東京都水道局水質センターに勤務。在職中、都立高校の臨時講師の依頼を受け、昭和56年に正式採用となる。60年、新潟に戻り小学校教員に。養護学校への異動を機に上越教育大学に内地留学し、特別支援教育を学ぶ。自閉症児の指導を専門とし、これまで県内6校で教育に当たる。新潟県特別支援学校研究協議会副会長。趣味はバドミントンとランニング。職場仲間と一緒に駅伝にも出場。

大学卒業後、東京都水道局勤務時に受けた、工業高校定時制の臨時講師の仕事をきっかけに教育の道に入りました。

新潟に戻ってからは、小学校の教員になりましたが、間もなく異動で特別支援学校（当時は養護学校）へ。はじめは、わたしの言うことが生徒に伝わらない現実に戸惑いましたが、障がいがあってもひたむきにがんばる生徒たちの姿に心を打たれ、腰を据えて障がい児教育に当たることを決心。上越教育大学に内地留学して専門知識を学びました。

現在の学校には、知的障がいをはじめ、肢体不自由、視覚障がいなどをもつ小学部、中学部、高等部合わせて29人の児童生徒がいます。教職員は校長を含め26人。教員のチームワークが重要です。特別支援学校の場合は、将来社会に出て〝生きていける力〟を身につけさせることが最大の仕事。障がいによって、成長は違いますが、個々に応じて内容をかみ砕き「子供の力を伸ばす」という信念を忘れてはならないと思っています。

成長はゆっくりですが、それだけに小さな進歩も感動的です。障がいがある子もない子も、将来の社会参加・自立に向けてのゴールは同じ。教員になったら一度は特別支援教育に携わってほしいと思います。

今後は、もっと積極的に生徒たちと市民が触れ合える機会をもちたいですね。閉じこもっていては何も始まりません。また、就職面で彼らの夢をかなえるために、作業療法士や言語療法士など専門家の協力を得てより細かな指導をしていきたい。そうやって生徒たちが生きていくための土台をしっかり築かせてあげたいと思います。

隣接する各木野小学校の児童と一緒に運動会の練習。両校は廊下がつながっていて行き来が自由。毎年、運動会は合同開催している

全校集会での交通安全のお話。生徒の関心を引くために腹話術人形を自前で用意。ほかの先生方もおのおの子供を引き付けるための工夫をしている

日大人 百花繚乱

多摩川は親子の楽しい遊び場 命と自然環境と水辺の安全を訴える

かつては涼やか清流と豊かな生態系が育まれていた多摩川。この川が昭和40年代、人間のエゴで死にかけていた。そんな多摩川に命の輝きを取り戻そうと奮闘してきた山崎充哲さん。今、多摩川から命の大切さ、自然環境の保全、水辺の安全をアピールしている。

おさかなポストの会 代表
山崎 充哲さん
昭和56年農獣医学部水産学科卒業

（やまさき・みつあき）昭和34年神奈川県生まれ。本学卒業後、大手釣り具メーカーに入社。退職後の昭和35年、環境コンサルタント会社・（株）建設技術研究社を設立する。その傍ら、多摩川の魚類研究をライフワークとし、特にアユの生態に詳しい。淡水魚類・魚道研究家、川崎河川漁業協同組合総代、ガサガサ水辺の移動水族館館長、水辺の安全教育委員会代表、東京都レッドデータブック選定委員、美しい多摩川フォーラム運営委員と多彩な顔を持つ。平成23年日本水大賞審査部会特別賞受賞。

河原にあがる元気な歓声 多摩川に子どもが帰ってきた！

「大きくなって、帰ってこいよー！」。ゴールデンウイーク後半の5月4日、小田急線登戸駅からほど近い多摩川の二ケ領上河原堰に子どもたちの歓声が響いた。手にしたバケツからアユの稚魚を川に放ったのだ。「多摩川春のアユまつり」。稚魚の放流やアユの遡上を観察するこの催しは「おさかなポストの会」の代表・山崎充哲が中心となって開き、今年で7回目を迎える。

このイベントには、多摩川を愛する山崎さんの工夫が随所にある。「参加者には、はじめに河原のゴミ掃除をしてもらいます。そうすることで河原にゴミを捨てないという気持ちを持ってもらいたい。その後、紙芝居でアユの生態や安全に川で遊ぶための約束を勉強します。そして、最後にお楽しみのアユの遡上観察と放流です」。そして、一番大切なルールが〝親子で参加すること〟。「川遊びや魚捕りのアイディアは父親の腕の見せ所。親子が楽しい思い出を作るチャンスだし、大人が子どもを守るということも知ってもらいたいんです」。

「死の川」といわれた多摩川 忘れられた多摩川

「僕らが子どもの頃は、多摩川にも屋形船が浮かび、河原には釣り人がたくさんいたものですよ」と語る山崎さんは、かつての賑やかな多摩川を知る最後の世代でもある。ところが昭和40年代、日本の高度成長期、多摩川から清流が消えた。流域の急激な都市化による生活排水の垂れ流しと宅地開発による水源の枯渇が主な原因だった。「悪臭と合成洗剤の泡だらけ」の川で、いつしか〝死の川〟と呼ばれるようになった。そして、川は、〝汚い〟〝臭い〟〝危険〟と大人は子どもを川に近づくことを禁じてしまった。

その頃、日大に進学した山崎さんは釣りサークルを創り、釣り大会を多摩川で開くことにした。ところが下見に行くと、ゴミの多さに驚いた。山崎さんは仲間と河原のゴミを拾うことにし、近所の人にも参加を呼びかけた。すると予想以上の人が手伝ってくれた。「皆、多摩川を忘れてはいない。何とかしたいと思っているんだと感じました」。

水辺で安全に楽しく遊ぼう 水辺の生命をもっと知ろう

昭和53年、多摩川上流水再生センターが完成し、高度な下水処理が行われるようになると〝死の川〟に清流が戻り、魚が帰ってきた。今では50種類以上の魚が泳ぐほどきれいな川になり〝汚い〟〝臭い〟はなくなった。しかし、川は「危険」という意識だけは残った。「今の親は、川は危険と教え込まれ、川の楽しさも安全に遊ぶ方法も知らない。だから、代わりにわたしが教えたいんです」。

多摩川がきれいになったことで新たな問題も生まれてきた。家庭でペットとして飼われていた魚が川に捨てられてしまう。多摩川は「外来種により、在来の魚たちの生息が脅かされています」。そこではじめたのが「おさかなポスト」。飼えなくなった魚を預かり、里親を探すことで、水辺の生態系を守る活動である。「一度飼育した生き物は、自然に返さないのがモラル。多摩川でしか生きられない、たくさんの命があることを、多くの人にわかってもらいたいですね」。

これからも、水辺の楽しさ、生命の大切さを訴えていくという山崎さん。多摩川が昔のような賑わいを取り戻す日も遠くないであろう。

1 紙芝居を使って川で安全に遊ぶための約束を子どもたちに教える山崎さん。「川で流されたらどうしたら良いの？」という質問に、元気良く一斉に手があがった　2 お父さんと一緒に受け付け。今日はお父さんと楽しい思い出づくりの日　3 元気な掛け声とともにアユの稚魚を多摩川に。次は大きくなって帰ってくるアユを見るのが楽しみ　4 魚道を遡上するアユを見つけている子どもたち。「あっ、いたいた。あそこあそこ！」。川を遡るアユを見つけて大喜び　5 見て・触れて・学べる「ガサガサ水辺の移動水族館」。直接魚に触ることで、命の大切さを感じてもらい、やさしい心を育んでもらいたいとの願いを込めている　6 「水辺の安全教室」。正しい知識を持っていれば、水辺は楽しい遊び場。水の事故から身を守ることを体験しながら学んでもらう　7 ジャンプ！　正しくライフジャケットを付けていれば川は怖くない！

川崎市の稲田公園内にある「おさかなポスト」。休日には、魚を預ける人、里親になりたい人がたくさん集まる

山崎 充哲さんの本「いのちの川―魚が消えた『多摩川』の復活に賭けた男」を抽選で3名さまにプレゼント。詳しくはP.72をご覧ください。

日大人 百花繚乱

島根が好き、野菜が好き、家族が好き 農家と消費者をつなぐ架け橋を目指して

移動は車、コミュニケーションはメールが主流のこの時代に、あえて昔ながらのリヤカーで野菜を売り歩く河津和彦さん。故郷・島根の農業を盛り立てたいと奮闘する河津さんの熱い想いを伺った。

山陰やさい家族 代表
河津 和彦さん
平成11年通信教育部経済学部卒業

（かわつ・かずひこ）昭和48年島根県生まれ。本学卒業後、東京の製紙会社に就職。4年後、島根に戻り「安全でおいしい食べ物」を移動販売する『山陰やさい家族』を立ち上げる。週4日は車でお得意さん回り、1～2日は仕入れと商談、2日はリヤカーで住宅街を歩いて顧客開拓と、365日休みなく働く。平成22年度「しまね『環境農業』大賞」優秀賞受賞。スローガンは「県職員よりも県職員らしく」。島根の若手農家が夢を抱ける環境づくりを目指して日々奔走する。

野菜、豆腐、パンなどの加工品を含め扱う商品は200種以上。えりすぐりの商品をリヤカーに乗せてお得意さんの元へ。リヤカーは開業祝いにお父さんが贈ってくれた

運命を変えたレタス農家さんの言葉

「こんにちは、八百屋でーす。新鮮な野菜が入ったんで、食べてもらおうと思いまして！」。

島根県・松江市の住宅街に元気な声が響き、お得意さんが顔を出す。声の主はリヤカーで野菜の移動販売をする河津和彦さん。保冷箱の中には島根産「エコロジー農産物」(注)をはじめ、こだわりの豆腐や調味料などがぎっしり。お得意さんたちは商品を選びながら、家族のこと、健康のことなど、河津さんとの立ち話に花を咲かせる。そこには、家族のような温かい空気が流れている。

『山陰やさい家族』が太鼓判を押す、島根産の野菜5点と奥出雲みそ（500g）のセットを抽選で3名さまにプレゼント。詳しくはP.72をご覧ください。

1「しまね『環境農業』大賞」の授賞式。「農家さんとお客さんあっての受賞。審査会では後ろにみんながおるつもりでしゃべりました。勇気を出してこの仕事を始めてよかったと思っちょります」 2リヤカーを珍しがって寄ってきた子供たち。無農薬のみず菜を食べて「あま～い」 3ほうれん草の仕入れで岸川勉さんのハウスへ。土づくりからこだわった岸川さんの葉物にはファンが多く、甘みがあって長持ちすると評判 4野菜の説明書きは奥さんの手書き。無農薬や有機栽培は手間がかかる分、値は張るが、農家の思いとこだわりを伝えることで、その価値を納得してもらえるようになった

大学卒業後、河津さんは東京の製紙会社に就職。働いて4年たったころ、運命的な再会をする。

「大学時代、島根のこだわり野菜を挟んだサンドイッチを訪問販売しとったんです。そのときの出雲のレタス農家さんが入院されたと聞いて、久々会いに行ったんです。そしたら『あのときは農家人生最高だった』って、言ってくれた。思いを込めて育てた無農薬のレタスが、サンドイッチという形で確実に消費者に届き、愛されたことがうれしかったって。一人でも多くの農家さんにこの思いをさせてやってくれと言われました」。

島根の野菜を島根の人に売る難しさを実感

大事なバトンを受け取ったと感じた河津さんは、すぐに製紙会社に辞表を提出。島根に戻って米穀店で働きながら、休日は仕入れ農家を開拓する生活を始めた。二足のわらじながらも『山陰やさい家族』の誕生である。当初は車で一軒一軒の家を訪ねて販売した。

「朝から夕方まで1日100件回っても5軒しか売れんことがしょっちゅう。それどころか、不審者がおるって通報されたり、水をかけられたり。つらかったー」。

そんなとき、心の支えとなったのは家族の存在だ。奥さんは時間の許す限り飛び込み販売を手伝い、まったく売れない日は2人で泣いて帰ったこともあった。それでもあきらめず活動を続けるうちに、「農家の思いを消費者に届ける」真摯な販売方法は農家の信頼を集め、仕入先は順調に増えていった。それに伴い、お得意さんの数も少しずつだが増えはじめていた。

15万円で独立。リヤカー営業で農家と消費者の心をつなぐ

2年がたったころ、「二足のわらじでは中途半端で農家に申し訳ない」と独立を決意。奥さんが用意してくれた15万円を元手に、河津さんは仕事に本腰を入れた。

販売・営業方法も再検討し、お得意さんへの販売は車、飛び込み販売のときは興味をもってもらうためにリヤカーを使うことに決めた。大学時代、陸上で鍛えた健脚でも、リヤカーを引いて15㎞を歩き、飛び込み販売をするのは重労働だった。しかし、地道な努力はやがて実を結び、独立から1年後にはお得意さんは300軒を超えた。そのころ、市内の貸しスペースで販売も開始。お母さんの協力で始めた、島根野菜のランチを供するカフェは販促に一役買っている。さらに、販売ルートを米子にも拡大。大学時代を過ごした「第二の故郷」世田谷周辺でもリヤカー営業をして約50軒のお得意さんを獲得し、隔月で野菜を送っている。

精力的な活動はやがて自治体の目に止まり、平成22年度「しまね『環境農業』大賞」優秀賞受賞につながった。「つらい時期もあったので感無量。効率化を勧める声もあるけど、それではお客さんとの距離が離れる。本末転倒です」。

商売の原点は心の結び付きだと語る河津さん。「農家のこだわりや思いを消費者に伝え、両者の心を近づけることは農作物の適正価格の実現につながります。島根を元気にするために農家と消費者の架け橋になってがんばります！」。

（注）農薬や化学肥料の使用量を抑えた環境に優しい農業への取り組みを目指し、島根県が独自で推奨する制度。厳正な審査の下、エコロジー農産物として認められたものには推奨マークが貼られる。

夢に向かって!

愛情を注いだ分、馬は応えてくれる 調教した馬の勝利が最高の喜び!

JRA美浦トレーニングセンター戸田博文厩舎
調教助手 石井 輝さん
平成13年法学部政治経済学科卒業

（いしい・ひかる）昭和54年埼玉県生まれ。父親が家のそばに厩舎を構えて馬を飼っていたため、幼いころから乗馬に親しむ。本学保健体育審議会馬術部では主将を務め、数々の大会で好成績を残す。卒業後は栃木県の競走馬の牧場で2年半修業した後、高倍率を制して競馬学校厩務員課程に入学。平成16年戸田博文厩舎に入舎して調教助手になる。好きな言葉は「努力は人を裏切らない」。

長くてハードな助手の一日

「この仕事は朝が早いんです。平日は4時半に厩舎に行き、厩務員さんと一緒に馬の調子を確認。その後、調教師に指示を仰ぎ、馬場に出て1頭1時間、一日に3～4頭の調教をします。午後は馬具の手入れや獣医の検診、馬のケアをして、終わるのは6時ごろ。レースのある土・日曜は、さらに早くて2時半に厩舎へ向かいます」。

そう話すのは、調教助手7年目の石井輝さん。大学4年生のとき、競走馬を乗馬用に調教する経験をし、その面白さと奥深さを実感。調教師の道へ進むことを決意した。

大けがから再起! レースに勝つ馬を育てたい

調教助手になって感じたのは、乗馬と競走馬のバックグラウンドの違い。「同じ馬でも競走馬には生産から育成まで多くの人の情熱と手間と莫大なお金がかかっています。なかには億単位の馬も。その馬を調教してレースに送り出す役割は責任重大。緊張しますが、やりがいがあります」。

平成18年には、自ら調教を手掛けたサラブレッドが最高の格付けレース（GI）のひとつ桜花賞（注）を制覇した。「スタンドからわき上がる地鳴りのような声援には馬もぼくもびっくり。鳥肌が立ちました」。

しかし、馬相手の調教は常に危険と隣り合わせ。3年前には馬の下敷きになり、ひざの脱臼・靭帯3本断裂の重傷を負った。医師には仕事をあきらめるように言われたが、プロ根性でハードなリハビリに耐え、奇跡的に復帰を遂げた。

「この仕事は努力が明確に成果に現れるので、がんばりがいがあります。目標は再びGIレースで勝つこと。そして、多くのレースで勝利を重ね、戸田厩舎を年間成績トップに押し上げたいです」。

第66回桜花賞にて。左が石井さん

はじめは真っすぐ走るのもままならない競走馬。馬の素質をどう伸ばすかは調教師の腕の見せどころ

（注）桜花賞毎年4月に3歳牝馬により争われる、日本の競馬クラシックレースの一つ。重賞レースの中では最高の格付け（GI）。

お達者通信

日本溶接協会鹿児島県支部 参与
島津 久治さん（しまづ・ひさはる）
（大正5年生まれ・94歳）
昭和15年工学部（現理工）機械工学科卒業

二・二六事件（昭和11年）を偶然目撃したことなど、学生時代の思い出を楽しそうに語る島津さん。島津さんは、今和泉の島津家出身。あの篤姫と血縁関係にあたる

（上）島津さんの学生時代、昭和13年に理工学部校舎内から撮影されたニコライ堂
（下）島津さんが描き、自宅居間に飾っているニコライ堂の油絵。62歳のときの作品。今にも鐘の音が響いてきそうだ

今も耳に残るニコライ堂の鐘の音 元気の秘訣はクロスワードパズル

毎週日曜日、東京・駿河台に響くニコライ堂の鐘の音。しかし、戦前は1日3回、街中にその美しい音色を響かせていたという。島津久治さんは、卒業から70年以上過ぎた今でも、居間に飾った自作のニコライ堂の絵を見るたびに、この音色を思い出す。

昭和10年、島津さんは大好きだった飛行機の勉強のため本学に入学。そこで初めてニコライ堂の鐘の音を耳にする。「学校はニコライ堂に隣接していましたから、毎日あの独特な、異国風情ある鐘の音が聞こえるんです。卒業まで毎日聞いていました」。

卒業後は、戦争で従軍し、戦後は鹿児島県職員（機械金属センター）として、多忙な日々を過ごしたが、定年後の趣味としたのが油絵だった。多くの絵を描いたが、一番のお気に入りは学生時代の思い出がよみがえる、ニコライ堂の絵だという。

最近はクロスワードパズルに熱中しているという島津さん。「社会情勢や国際関係、若者文化や流行など、あらゆることを知らないとパズルは完成できません。だから興味が刺激されて面白い。分からないことは、調べたり、息子夫婦や孫に聞いたりするから、皆との会話のきっかけにもなっています」。島津さん元気と若さの秘訣である。

日本大学　商学部校友会

高橋 義麿会長
昭和40年商学部商業学科卒業

（たかはし・よしまろ）昭和15年岩手県生まれ。本学卒業後、大阪の企業に就職。昭和41年、実家の高章洗染株式会社に入社。平成３年社長、22年会長就任。北上市議会議員を昭和54年から通算４期務め、11年全国市議会議長会より表彰される。趣味はゴルフと読書で、特に歴史関係の本を愛読。座右の銘は「一生懸命」。

商学部の歴史は、明治37年に商科が設けられたことに始まります。商学部はその後、経済学部と一緒に発展してきましたが、現在の商学部の名称が使われるようになったのは昭和32年。三崎町から砧に校舎が移されたのは38年でした。その当時の校舎といえばプレハブの建物が数棟だけで、周囲は一面の野原。学生や職員が協力してグラウンドなどの整備をしたものです。そのため、学生たちには自らの手で学校を立ち上げたという自負、そして強い愛校心が芽生えていました。

わたしもその一人です。

わたしたちが卒業し、砧同窓会を立ち上げたのは昭和43年で、この会が商学部校友会の前身となりました。当時、商学部の校友会は経済学部と合同で、商学部校友の独自性がなかったので、まずは砧同窓会を作りました。この同窓会が正式に商学部校友会と認められたのは49年、念願かなったという感じで感無量でした。

主な活動は、年１回の総会と会報の発行、定期的な名簿の作成やホームカミングデーの開催などです。校友同士のつながりを深めるだけでなく、昭和57年に商学部校友会奨学金を立ち上げるなど、常に大学と学生のことを考えた活動を心がけております。

校友も、大学のために何ができるかを考え、学生の就職支援や大学のＰＲ活動ができればと考えております。前会長・菅脩氏が平成８年、特別寄付を行い、菅奨励金を設立し、学生の支援を行っているのも、その姿勢の表れです。

校友会としては、親睦を図るためだけの会ではなく、常に大学を発展させるためにアイデアを出していける会であり続けたいと考えております。今後も多くの校友のご意見をお聞きしながら、より開かれた校友会として活動を推進していく所存でございます。

日本大学商学部校友会会報

日本大学校友会　群馬県支部

高木 政夫支部長（中）
昭和47年農獣医学部農業工学科卒業

（たかぎ・まさお）昭和25年群馬県生まれ。本学卒業後、民間企業へ就職した後、群馬県へ帰郷。各地で長期間、土木作業に従事する中、足尾銅山の閉山で人々が街から出て行く状況を目の当たりにし、ふるさと前橋のために汗を流すことを決意する。昭和52年から平成15年まで、前橋市議会議員、群馬県議会議員、群馬県議会副議長、群馬県議会議長を歴任。現在は前橋市長。趣味は家庭菜園、ウォーキング、ハイキング、野球、ゴルフ。
（右は幹事長の水谷富哉さん、左は副支部長の高木照雅さん）

群馬県内にはさまざまな校友の会があります。県庁内の「みやま桜門会」は20年以上前に２５０人の会員で発足しました。また、獣医の集まりである「角笛会」も長く活動を続けています。その他、職種別の集まりや出身学部別の会などもあります。

一方で、群馬県支部としての活動は一時、休止状態でしたが、「青春時代に自分たちが学んだ大学に対する思いを途切らせてはならない」という県内の校友の強い思いから、７年前に群馬県支部を再始動させました。日本人だけでなく、世界中どこの大学の出身者でも同じだと思うのですが、人はある年齢になると自分が生まれ育ったところが懐かしく思えるように、母校に対する郷愁が強くなってくるものなのです。

現在は、約50人の幹事を中心に、校友なら誰でも自由に参加できる総会を年１回開催し、群馬県内約８７００人の日大校友のための、自由で開かれた桜門会の運営を進めています。同窓の〝絆〟の中から、互いに親交を深め、あるいは事業や社会貢献へとつながっていけばいいと考えています。

本部からは、毎年、群馬県支部に登録した正会員の年会費の30％が支部に還付されています。これを原資にすることで、当面の活動としては、他大学の同窓会が行っているようなゴルフコンペでもいいですし、あるいは時代の先端を行く母校の先生方をお招きしての講演会を主催し、会員だけでなく広く市民の皆さんにもご参加いただくようなイベントを開催してもよいのではないでしょうか。

いずれにしても、支部の活力源は、校友一人ひとりの積極的な参加です。「校友会活動に参加したい」という方は、ぜひご連絡ください。総会にどしどしご参加いただき、群馬県ならでの活動を一緒に進めていきましょう。お待ちしています。

昨年の群馬県支部総会の記念写真

書籍紹介

バス停留所

著者／柴田秀一郎
（写真作家／昭和62年法学部政治学科卒業）
発行元／リトルモア　　価格／2,625円（税込）

フーテンの寅さんが、トトロのねこバスがやってきそうなバス停がある。深い雪から顔だけ出していたり、朽ちながらも踏ん張っているバス停もある。郷愁と想像力がかきたてられるモノクロームのバス停188景。著者が10年にわたり、北海道から沖縄まで47都道府県を巡り、撮影した作品の数々である。

写真の多くに人のにぎわいはなく、過疎の現実が映し出される。しかし、ページを繰るにつれ、バス停にまといついた土地の人の体温や細やかな日常が、心に染みてくる。都会的なドラマが似合う駅や港ではこの情感は映せない。

原爆が消した廣島

著者／田邊雅章
（映像製作者／昭和35年芸術学部映画学科卒業）
発行元／文藝春秋　　価格／1,890円（税込）

原爆ドームを知る人は多いが、被爆前のその姿を知る人は何人いるだろうか。自宅がドームの東隣にあり、原爆で両親と弟を失った著者は、13年の歳月をかけてCGによる爆心地復元事業に取り組んだ。

本書はそれらのCG資料や写真、そして当時8歳の著者の鮮明な記憶に基づく文章が、一瞬にして消滅した爆心地周辺の「廣島」の町とそこに暮らす人々の息吹をよみがえらせた。

そのハイカラな町並みと、ささやかながらも心豊かな人々の生活。復元された懐かしいふるさとの姿は、原爆という人類最大の愚行に鋭い告発を突き付けている。

Book Review

青雲たなびく　“東京・港区長”になった男の物語

著者／菅谷眞一
（元港区長／昭和36年法学部第二部法律学科卒業）
発行元／東京書籍　　価格／1,680円（税込）

持ち前の情理と侠気で、幼いころから数々の修羅場をかいくぐってきた著者は、中学卒業と同時に港区役所に奉職した。昼間は給仕として雑用をこなし、夕方からは都立芝商業高校の夜間部学生として勉学に励む。その後、東京都の職員採用試験合格、本学法学部の第二部（夜間部）卒業を経て総務課長などを歴任。熾烈な選挙戦を制し区長となってからは、破綻寸前の港区財政を立て直し、港区を「住みたい街No.1」に押し上げた。

英知と人脈で人生のさまざまな転機を乗り越えてきた自身の半生をつづった本書は、人間の本質をも鮮やかに浮き彫りにしたドキュメンタリーである。

今回紹介した３つの書籍を抽選で各３名さまにプレゼント。
詳しくはP.72をご覧ください。

校友会 N·E·W·S

校友会役員総会で田中氏を会長に再選
日本大学の「東日本大震災被災学生支援寄付金」に１億円寄付

平成23年度の日本大学校友会役員総会が７月１日、東京ドームホテル（東京都文京区）で開かれました。今年は役員改選の年にあたり、総会に先立ち行われた会長選考委員会により推挙された田中英壽氏の会長就任を満場一致で決めました。田中氏は、平成17年の役員改選で校友会長に就任して以来、３期続けて会長を務めることになりました。

総会では、平成22年度の準会員への診療費助成や奨学金、23年度校友子女入試の結果と24年度入試の概要、22年度の各種運営委員会の活動などの報告がされた後、22年度収支決算、23年度事業計画と収支予算、東日本大震災被災学生支援寄付金などが審議され、すべて議案が承認されました。このうち、「東日本大震災被災学生支援寄付金」に関する議案は、３月11日に発生した東日本大震災で被災した日本大学で学ぶ学生の支援のために日本大学が募っている「東日本大震災被災学生支援寄付金」に対して校友会から１億円を寄付するものです。また、来年度の特別優待生制度からは、校友子女入試制度を利用し日本大学に入学した正会員の子女に対して、一律10万円（医歯薬は20万円）の奨学金を与えることが報告されました。

引き続き、支部・部会への補助金交付式、震災で被害の大きかった６県（青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉）の支部長に「災害見舞金」（１県100万円）が交付され、日本大学への寄付金は田中校友会長から酒井健夫日本大学総長へ１億円の目録が手渡されました。最後は、平成23年度校友子女入試特別優待生への賞状授与式が行われました。授与式には、特別優待生に選ばれた11人のうち、７人が出席し、田中会長から賞状が授与されました。

３選された田中英壽会長

田中会長から賞状を受け取る特別優待生

●平成23年度事業計画について

1　各種運営委員会・各支部総会開催計画
2　正会員・準会員事業計画
①桜門会館の管理運営
（会則第３条第１号「桜門会館運営事業」）
②校友子女入試の推進
（会則第３条第５号「日本大学学生募集への支援事業」）
③全国校友大会の開催
（会則第３条第３号「会員の福利厚生に関する事業」）
④スポーツの振興と推進
（会則第３条15号「体育活動助成事業」）
⑤スポーツ優勝者表彰
（会則第３条15号「体育活動助成事業」）
⑥スポーツに対する奨励金交付
（会則第３条15号「体育活動助成事業」）
⑦全学文化事業（ＮＵ祭）支援
（会則第３条15号「文化活動助成事業」）
⑧診療費助成
（会則第３条17号「準会員に対する診療費助成事業」）
⑨校友会独自の奨学金
（会則第３条14号「準会員に対する奨学事業」）
⑩校友子女入試の充実に伴う特別優待生制度の拡大
（会則第３条14号「準会員に対する奨学事業」）
⑪その他必要とする事業
（会則第３条18号「その他必要事業」）

以　上

●校友会新規加盟団体について（平成22年度役員総会以降）

大林組桜門会　　東京美装興業桜門会

特別優待生に聞く　喜びと校友への感謝の声

高橋 綾香さん
芸術学部写真学科１年

兄も文理学部で勉強していますが、兄がお友達いるととても楽しそうにしているので、日本大学って、良い学校だなと思っていました。将来は雑誌作りをしたいと思い写真学科に入学しましたが、写真は全く初めてなので、不安でした。でも、分からないことを聞くと先生も助手の方も皆が親切に教えてくれ助けてくれるので今では不安は消えました。今回、特別優待生に選ばれビックリしましたが、多くの校友の方に支えられていることを忘れず、夢に向かってがんばりたいと思います。

相澤 義尚さん
生物資源科学部
食品ビジネス学科１年

子供のころからサッカーをやっているので食生活の大切さを感じていたので、食品ビジネス学科に行きたいと父に話したら「お父さんもそこで勉強したんだ！」と言われて驚きました。合格してからは、父がいたころの大学の様子や先生の話を教わっています。そして「俺よりすごい人間になれよ！」と励まされています。大学の授業は90分授業で、高校までより全然長いので結構大変ですが、サッカーのサークルに入り、先輩や仲間と楽しくやっています。

特別優待生の授賞式に参加した７人の新入生

日本大学桜門社長会（仮称）開催

日本の大学で社長数がトップという他大学に対する優位性を活かし、その人的資源を本学の教育研究に活用することを目的とした日本大学桜門社長会（仮称）の設立会が７月８日、日本大学桜門会館で開かれ、関東の１都６県を中心に約100名の校友社長が集まりました。

会の冒頭、発起人代表の池上通信機株式会社・松原正樹社長（昭和38年法学部政治経済学科卒業）が「帝国データバンクの調査で、日本大学出身の社長は全国で２万6099人。出身大学別社長数では、28年連続トップになっている。この人脈、情報交換を通じて社会貢献を目指しましょう」とあいさつ。その後、発起人のひとり、矢羽根本家株式会社の根本昌卓社長（昭和55年生産工学部機械工学科卒業）から設立趣旨の説明が行われ、校友社長の組織化により生まれるネットワークを通して、ビジネスの拡大とともに、その活力を大学の新たな経営・教育研究の資源として活用することが、満場一致で承認されました。

今後は、会則等の整備を行うと同時に、全国の社長に参加を呼びかけ、来年７月の発足を目指します。

（上）あいさつをする発起人代表の松原正樹社長。左は根本昌卓社長
（左）設立会終了後に行われた懇親会。初対面の社長同士も校友とあれば、自然と学生時代の話に花が咲き、とても和やかだった

第2回校友会公式ポスター大賞授賞式

日大スポーツ飛躍への思いを学生がデザインするという趣旨で公募された、「第２回校友会公式ポスター大賞」（スポーツ振興特別委員会主催）の入賞６作品が決まり６月13日、授賞式が日本大学桜門会館内で行われました。

応募点数15作品の中から最優秀賞に輝いたのは芸術学部４年・京野朗子さんの作品「躍動する日大スポーツ」。京野さんには、田中英壽校友会会長から記念の盾と賞金20万円が贈られました。

京野さんの作品は、保健体育審議会に所属する31競技部を31の炎模様と色で表現したもの。黒い背景の中で、躍動的に躍るひとつひとつの炎が、全体的にリズムを保ちながらも力強く燃え上がり、日大スポーツの調和と飛躍を見事に表現していることが高く評価されました。

このほかの受賞者は次のとおり。▽優秀賞２作品　黒岩武史（芸術学部３年）、中村優実（同２年）▽佳作２作品　中川美沙（同３年）、永田泰佑（大学院芸術学研究科博士前期１年）▽校友会会長賞１作品　高橋洋平（芸術学部３年）

（右）最優秀賞を受賞した京野さんとその作品
（左）受賞者と審査委員の記念写真

インフォメーション

◎本誌への情報提供、ご意見、お問い合わせは…
この会報誌は、会員相互のコミュニケーションを深めていただくことを目的に、1人でも多くの校友や在学生の紹介記事を載せています。お店やお宿を経営している方、ユニークな先輩や後輩をご存じの方、自分を紹介してほしいなど、自薦他薦を問いませんので、事務局までお知らせください。

◎住所・勤務先が変わったら…
住所、勤務先等に変更がございましたら、必ず事務局までお知らせください。
電話、FAX、メールいずれの方法でも結構です。

◎会員証を紛失されたら…
会員証を紛失された際は事務局までご連絡ください。再発行いたします。

◎新規会員を紹介したい…
新規に会員希望の方をご存じの方は、事務局までご連絡ください。資料を送付いたします。

1 封筒、はがきで
〒102-0076
東京都千代田区五番町2-6 日本大学桜門会館
日本大学校友会本部事務局校友課『桜縁』係

2 電話、ファクシミリで
TEL 03-5275-9300
FAX 03-5275-9122

3 電子メールで
E-mail：koyu@nihon-u.ac.jp

桜縁 No.19 平成23年7月発行
編集・発行 日本大学校友会
〒102-0076
東京都千代田区五番町2-6 日本大学桜門会館
TEL 03-5275-9300 FAX 03-5275-9122
広報委員会
委員長：綾部 東洋子
委　員：石　光　井上 閑陽雄
内田　章　小橋 恵津
中村 克夫　萩原 正芳
茂木 完仁　齋藤 茂和
齋藤 正道　大熊 智之
高橋　浩　堀　敏一

編集後記

3月11日は、午後3時から桜門会館で「桜縁」制作スタッフと今号のキックオフミーティングが予定されていました。余震の中、一応の打ち合わせは行ったものの、その後の震災被害を受けて、急きょ特集の内容を「東日本大震災」に変更しました。

復興に向けてがんばっている校友を取材するため、5月中旬から現地に行きましたが、被災地の時計の針は、あの日からほとんど進んでいないこと、そして、まだまだ「復興」を語れる状況ではないことを痛感しました。

取材では、震災を経験した校友の方々が語るふるさとへの想い、力強く復興に取り組む姿勢、被災地を支援する校友たちの熱き想いに触れ、取材した方々の真情がストレートに伝わるように、紙面に想いを乗せて編集作業を行いました。被災された地域の一日も早い復興と皆さまの安心と安全をスタッフ一同、心よりお祈り申し上げます。

次回は、今号で予定していた「東京スカイツリー」を特集しますので、お楽しみに。

（T）

平成23年度日本大学全国校友大会開催について

平成22年度日本大学全国校友大会

全国の校友の皆さまにご参加いただき、毎年盛大に催されている全国校友大会が、今年も11月14日（月）に開催されることが決まりました。この大会は、全国の校友と日本大学の役員・教職員が年に一度、一堂に会し交流することで“絆”を深め、同窓としての意識を確かめ合い、日本大学のさらなる発展に寄与することを目的としています。昨年は全国から、これまでで最も多い1,000人を超える校友の皆さまにご参加いただきました。今年はさらに多くの校友の方々にお会いできることを願っております。

なお、正会員の皆さまには、ご案内を郵便でお届けいたします（10月上旬予定）。校友会のホームページでも告知いたします。

開催日時	平成23年11月14日（月）　午後6時～
会　　場	東京ドームホテル　天空（地下1階） （東京都文京区後楽1－3－61）
会　　費	10,000円
申し込み方法	郵便振替による会費振り込みでの申し込み。 詳細は、校友会事務局からの案内をご覧ください。
問い合わせ先	日本大学全国校友大会事務局 （校友会本部事務局庶務課） TEL 03-5275-8143　FAX 03-5275-8330
ホームページ	http://www.nihon-u.ac.jp/

桜縁No.19

読者プレゼント

巻末のアンケートにお答えいただいたかたの中から抽選でプレゼントを差し上げます。ご希望の商品番号をアンケートはがきにご記入の上、ご応募ください。なお、当選の発表は商品の発送をもって替えさせていただきます。

01 いわき市
「がんばっぺいわきプロジェクト」の絵はがきとリストバンドをセットで

抽選で10名さまに

02 いきいき亭
「ほたるいかの沖漬け」

抽選で3名さまに

03 山崎充哲さんの本
「『いのちの川』魚が消えた『多摩川』の復活に賭けた男」

抽選で3名さまに

04 山陰やさい家族
「島根産の野菜5点と奥出雲みそ（500g）」をセットで

抽選で3名さまに

05 田邊俊彦さんの本
「原爆が消した廣島」

抽選で3名さまに

06 柴田秀一郎さんの本
「バス停留所」

抽選で3名さまに

07 管谷眞一さんの本
「青雲たなびく“東京・港区長”になった男の物語」

抽選で3名さまに

がんばれ！日大スポーツ

31部のちから

スポーツの日大復活のために

寄付金募集

郵便振替口座

口座名

日本大学校友会スポーツ振興特別委員会

00190-7-585685

問い合わせ先

日本大学校友会本部事務局校友課
〒102-0076 東京都千代田区五番町 2-6
日本大学桜門会館
TEL 03-5275-9300
FAX 03-5275-9122
http://www.nichidai-sports.jp

自主創造
日本大学

日本大学校友会スポーツ振興特別委員会

このデザイン画は、芸術学部4年・京野朗子さん制作の第2回校友会公式ポスター大賞最優秀賞受賞作品です。